川柳の雑誌

麻生路郎 ☆ 主宰

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi

No. 296

一月號

不朽洞賞カップ 把持者の横顔

絵と文　種　瓜　平

企劃好きの実行家

上田　翠光氏

（十月句会優勝者）

十一年前香林さんにすゝめられ翠峰と号して川柳界に入つたが間もなく翠光と改名した。水泡が遂行になつたほどあつて、句もうまいが、行事や句会の企劃は必ず遂行する実行家である。一昨年夏の句碑建立、昨年一月十五日の奈良山焼川柳大会、來春はアヤメ池に路郎氏の句碑を計画中であると。石は家の附近の山から牛車で運んでみせる氣慨もあり、フイルドを得意とするスポーツマンとゆう快男兒ぶり。農業の傍お茶の製造販賣もやつてをられる。

昔から色の白いは七難隠す。と言うが、この人は、色が黒いので大いに得をしている。柳会などで遅くなり近鉄三本松駅から4キロの山道を歩いて帰らねばならないが、未だ一度も物騒な目にあつたことがない。ぬば玉の闇で氣付かれないのだろう。

羊羹、ぜんざい、ナスビが好物とくるからには嗜好が皮膚の色となつたのかな。

ところが、男性的魅力が相当なものらしく、女の人と秋の夜に（但しこの場合は月夜）散歩するのが大好きで

感情を殺しているのに髪匂ふなど艶めかしい快心の作があり、一番うれしかつたのは奥さんを貰つた時で（これは誰でも）、結婚前に貰つたラヴレターはマスコットとして大切に保存していると。

今度翠光さんの宅へ行つたら、大いにぜんざいとお茶を頂こう。しかし、あの山道はシンドイね。

詩的な句が作りたい

阪田久仁於氏

（十二月句会優勝者）

二十八才の青年作家。詩や短歌をやつていたので

赤い爪やはりきれいな指でした

といつた美しい詩的な句が作りたいそうである。

川柳をやる氣になつたのは終戦後ふと岸本水先府生の句をみて、大いに共鳴したからで以來番傘で勉強していたが、川雑の例会へは三回目の出席であると。

一九五一年の止めを刺れた形ですね。と、筆者が頭をかくと、勉強ですから暇さえあればどこの句会にでも出ますと。

奈良縣牙れでガス会社の圧送係と言えば、上へオの字をつけるとケツタイですね。

講生師の講演にもあつたように、電氣や交通のストは我々大衆にとつて誠に迷惑だ。同情なんてするものかと筆者がボヤくと、「西島工場の労組副支部長をやつているが、やはり公共事業のストはいけません。やりたいとは思わん」

至つて穏健派だから御安心。

適齢期なので、どうしても美しく女性を詠んだ句が出來るそうで、妻を選ぶなら、毎日晩酌を用意してくれて、詩を解し、共に川柳の一つもつくり、肉に対する葱のようなのが欲しいそうな。いつもすき焼が焦げつきそうですね。

酒販用アイスクリーム用紙コップ
其他食堂用紙製品一切

特殊紙器工業株式會社
株式會社コップ
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話天下茶屋(66)2802 2803

謹賀新春

橋本綠雨
大阪市東住吉区平野西之町八三
電話天王寺一一六七番

上田翠光
奈良縣宇陀郡三本松村
向淵　川雑大和支部

長野井蛙
山口縣小郡

増田耕民
鳥取市川端一丁目三七

角一川柳白鷺会
大阪市西島区鷺洲
中二丁目五番地
角一ゴム株式会社

高峰柳兒
長野縣南坂町六六七

渡辺曉童
愛媛縣越智郡津倉村仁江

徳永雅美
大阪市東区岡山町三五八

黄瀬美秋
滋賀縣甲賀郡貴生川町三本柳

小倉へどち
大阪市西区江戸堀下通
一ノ八合北永瑞連絡所

不朽洞句帖

麻生路郎

車中にて
出雲市を虹が包んだ一人旅

鳥取駅にて
車窓から蟹をもらつて親しまれ

葉巻を咥え日本を自由にし

パチンコの煙草かいなと喫われて居

箸紙を書くに一本つけさせる

二級酒でよけりや正月呑みに來い

正月も昔は紫雲たなびいた

元日の卓上日記晴とだけ

一月号目次

題字……麻生路郎
表紙……石田兵太郎
續川柳講座(2)……麻生路郎……(四)
川柳漫釈(5)……小畑自由朗……(三)
ベターハーフを語る……(一九)
瓜平・豆秋・生々庵・久米雄・伍健・
滑天・弓削平・風來子・良坊・省二・
十九平・八歩・卜占・迷窓・茶々・満
年・水車・牛休門・大八・鮎美・孫
捐・緑之助・春集
徒然草と古川柳……富士野鈴馬……(二四)
作家水谷鮎美を論ず……福田山雨楼……(一〇)
私達のグループ……仲温川柳会……(二三)
詠史川柳「につぽん」(完)戸田古方……(一三)
不朽洞賞カップ
把持者の横顔……種瓜平……(一二)
壽像贈呈者御芳名(2)……(二五)

★

不朽洞句帖……麻生路郎……(三)
近作柳樽……麻生路郎選……(一四)
川柳塔……麻生路郎選……(六)
同舟近詠……諸家……(一一)
一路集「一泊」……菊沢小松園選……(二五)
各地柳壇……(二六)
動静……(一八)
不朽洞会から……(二三)
編輯局にて……(一八)

續川柳講座（26）

麻生路郎

勅題の句に就て

川柳でも、歳末になると勅題を作句して新年の新聞や雜誌に掲出していますが、勅題の句として從來、どんな句が詠まれたか、又どんな句を詠めばいゝのかと云うことに就て少しく述べて見ましよう。

だいたい勅題は御歌会始に國民一般から詠進する歌のために課せられた題であつて、川柳のために特に出題されたものではありません。從つて、その殆んどが川柳の作句に適しない課題となつて居ります。

一、二例を挙げますと、「漁村曙」や「朝陽映嶋」や「池辺鶴」のような題でありまして、絵画的な歌や自然観照の歌には適するでしようが、川柳のように人間味を強く押し出す批判的な短詩の課題としては全く適しないのであります。どんな課題であろうと、作つて作れぬことはないのでありますが、題によつては佳吟が得られないと云うことは云い得られるのであります。川柳には何処までも川柳としての題があることは、歌には歌の題があり、俳句には俳句の題があるのと同様であります。今後川柳にも歌同様に勅題又は御題による句を詠進するような機会が與えられるとしたら、勿論川柳の作句に適するような題が課せられるであろうことは云うまでもありますまい。しかしこれまでの課題は川柳の立場から観てあまりにもかけはなれた題であります。從つて名吟として推奬するに足るほどの句がなかつたと云つても過言ではありません。少しく例示して見ましよう。

漁村曙

鉢巻をはづし初日へ向く漁師（をさむ）

漁村曙出征勇士送られる（鮎美）

初日キラ〳〵網は殺生忘れてる（葭乃）

海の幸や曉の魚待つ母や子や（三太郎）

漁村曙ひとりひとりに海の幸（路郎）

以上は昭和十六年の勅題「漁村曙」を詠んだのでありますが、川柳の特色は少しも出て居りません。

「鉢巻を」の句は海浜の一情景を素直に写生したまでであつて川柳の味とか、匂いとか云うようなものを感じることが出きません。少しく極端な云い方かも知れませんが、「出征勇士」の句も矢張り海浜の一情景を詠んだもので、主人公が前句は漁師であるのが後句は出征勇士となつている位の相違で共に第三者を感激させるだけの迫力を持たない句だと云えるでしよう。作者自身も勅題と云う一つのワクに囚われて作つたのであろうと思われるほど作爲を感じさせられるのであります。

「初日キラ〳〵」の句は擬人法によつて、いささか川柳の味を出すことは出していますが、それにしても無難な作であると云うに過ぎません。

「海の幸や」の句も、「鉢巻を」の句や、「出征勇士」の句のように、これ又磯辺の一情景を詠んだのにすぎないのでありますが、ただ技巧でもつて句に重味をつけようとしているのが前二者と違つています。しかし、折角の技巧もこの句の場合では、むしろ技巧の臭味が鼻につく位のものです。名作家三太郎にして勅題をこなし得ないことは以上の通りであります。拙吟の「漁村曙」の句が拙いことはあらためて云う必要もありますまいが、拙作は「出征勇士」の句と同様に御題の「漁村曙」をブツツケに押し出しています。こうした作り方は、この句のような場合には狡るい方法だと云わねばなりませんが、「鉢巻をはづし」の句のように「漁村曙」と云う語を抜いて作句するとなると、勢い「漁村曙」を説明する一情景を描くだけの句に陥入り易いので、それを避けようとしたのに外ならないのであります。しかし、それがために作品の價値が、どれだけよくなつたかは疑問であります。凡作である点五十歩百歩だと云えるでしよう。

こゝで私たちは課題「漁村曙」について一應検討して見る必要があります。若し課題が「漁村曙」と云う特定の情景でなく、「漁村」と云う題であり、「曙」と云う題であるとしたら、どんな句が生まれるかと云うことであります。おそらく、もつと自由な、もつと巧い句が詠まれるに違いないと思われるのであります。前述したように、川柳には川柳としての題があります。しかも課題によつては佳吟が得られないことがあることは作家の誰もが既に経験済みだと思います。歌に課される題、殊に勅題のような型にはまつた題で川柳を詠むことは、柄にもない借着がうまく身につかぬのと同様の難点があるのであります。どうにかお茶を濁ごせることはあつてもピタリと身につかぬ場合の方が多いのであります。例を「漁村曙」にとりましたが、「漁村曙」一題だけでは少しく物足りないかも知れぬと思われますので、更に他の勅題の幾つかを例示して参考の資と

最短時間で結ぶ
大阪－名古屋
3時間 特急
毎日3往復
座席指定制一
特急料金 ¥100
上本町發 7.40 12.40 16.40
名古屋發 8.00 13.00 17.00
近畿日本鉄道

することにいたしましよう。

朝陽映嶋

朝陽映嶋膺懲の船西さして　（路郎）

初陽昇る元より洲は日の出島　（三太郎）

海上雲遠

初日きりきりはつきり雲と海にする　（三太郎）

寢轉ぶ癖の僕に海上雲遠し　（路郎）

池辺鶴

鶴一羽二羽三羽四羽五羽の春　（鮎美）

池の鶴一月一日を皓し　（三太郎）

「朝陽映嶋」は昭和十四年の勅題で「海上雲遠」は昭和十一年の勅題、「池辺鶴」の方は昭和十年の勅題であります。「膺懲の船」の句は表面光輝ある軍艦マーチの威力を詠つてはいるが、何処となく淋びしさが感じられる句であります。これは私の性格の表れであることは勿論であります。「初陽昇る」の句は所謂机上作で技巧だをれの句だと云われても弁明の余地のない凡作であります。次の「初日きりきり」の方は、同じく初日をとりあげていても、一読、雄大な情景を感じさせられます。しかし川柳であると云うよりも、より短歌的であると云えるのであります。勅題のことであるから、これでいゝのだと云えぬこともありますまいが、矢張りどつかに課題の説明にすぎぬのではないかと云う物足りなさが首をもたげるのであります。技巧が巧まければ巧いだけにそんな感じがしてならないのであります。

拙作の「寢轉ぶ癖の」の句は、今までに自分が詠んだ勅題の句の中で、尤も好きな句であり、多少川柳としてこなせているのではないかと思つている句ではありますが、「初日きりきり」の句の場合の物足りなさとは違つた物足りなさがあるのであります。それは、川柳味がいささか稀薄であると云えば云える、其の点からの物足りなさではないかと思われます。尤も「初日きりきり」と比較すると、「初日きりきり」よりも川柳味の濃度が強いとは云えますが、勅題として何れが成功しているかと云う点になると難しい問題だと思います。

次に「池辺鶴」の「鶴一羽」の句は数的に興味を感じたと云う以外に、とらえどころがありません。殊にこの句の表現では池辺の鶴か、松上の鶴か、飛翔中の鶴か、その情景が全く無視されていて、第三者に何等訴えるものがありません。極端に云えば川柳の埒外の句だと云えるでしよう。同じ「池辺鶴」を詠んだ句でも「池の鶴」の句は技巧の妙味を最大限に発揮して「一月一日を皓し」と詠んでいます。情景を髣髴とさせる点実に巧いものだと思いますが、川柳的魅力について考えると、矢張り影が薄くなつて行くように思われます。これは作者の難点と云うよりも、従來の勅題の題そのものが、川柳の詠題として適せないのが、最大原因ではないでしようか。

従來の勅題に対しては「池辺の鶴一月一日を皓し」や「寢轉ぶ癖の僕に海上雲遠し」以上に詠むことが出來ないとしたなら、歌の勅題以外に、川柳には川柳の勅題を出してもらい、より自由に創作して川柳の持ち味を充分に発揮するより外に手はあるまいと思います。しかしそんな時代が來るまでには、まだ〳〵相当の歳月を要することはその道にいる人達に歌に対する貴族趣味の残滓が残つている限り施行される筈もないからであります。

明治七年に、明治天皇が、御歌会始に、國民一般にも詠進せしめられた趣旨は、歌を通して國民の意見を自由に述べさせようと企図されたのではないかと思われます。その時の勅題が、「池辺鶴」や「漁村曙」ではなく「迎年言志」と云う勅題である点から観ても、万機公論にとわれた点にも合致すると思うのであります。この想像が單なる憶測でなく、國民に詠進の道をひらき、歌を通して弘く國民の声を聽かれようとしたのであるならば、今日川柳に勅題を課し、川柳を通して國民の声を弘く聽取されることも決して徒爾ではありますまい。

川柳ほど直截に人心を、社会をありのまゝに反映するものはないからであります。

他日、川柳に対して直接勅題が詠せられるとなれば、勅題句の幅も今よりはズツとひろがり、深さもウンと加わることでしよう。

斯く申したからと云つて、私自身は川柳に対して別個に勅題を課されることに期待を持つているものではありません。たとえ勅題が出ても創りたい人達が作るにすぎないと思うからであります。

結婚式場

6階

着付から美容
髮式、寫眞、披露
まで一切承り
ますのでお便利
きわめてございます

借貸交渉も一切取扱えてございます

松坂屋

金曜定休

大阪日本橋

本社新春句會

日時　一月五日午後六時

場所　南区三休橋南詰　大宝文化会館

兼題

「元日」「慾」「羽織」

席題・選者は当日発表

●当日、一時間前から不朽洞賞カップ優勝者の決戰句会が行われる。

●例会全出席者を当日表彰する。

プロの詳細は省略。

●會費　五十円

――参会歓迎――

川柳塔

大阪市　中島生々庵

ひがまずに芽出度き事を見つけたり
父ちやん一人おめでたそうに三ケ日

大阪市　武部香林

髭剃つて秋の孤独をたのしまん
また轉居したか附箋が二三枚
パチンコへぼんやり立つても一生か
Zボールで運だめしする宵の口
停年を淋しがつてる友に逢ひ
牧穫高が閣議で決まるおもしろさ
押しのけて改札を出てフト淋し
手紙も書かず高野豆腐のやうに老け
世話女房懐紙ハンカチメモ名刺

兵庫縣　戸倉普天

今日は稻熱病明日ウンカの予防とか
客の柄が落ちて來ますと宿嘆き
せまい橋稻の車力をバスが待ち
赤字続きまだ自家用車手放さず

平塚市　木村孤浪

忘れようとした子を師走の風が呼び
原つぱの子等見る妻の眼はうつろ
のど自慢アナは余計な事も聞き

横浜市　福田山雨楼

やもめ暮しは果物の皮
叱られる幸福を知る師の手紙
お隣りの奥さん癌で入院よ

その上に蛔虫までが僕を喰い

祖父母、叔父、長男の法要

法要は年忌違えたままで済み

布哇　内藤草一郎

陽に干せる夜具に子供の如く寢る
大病をしてから継母の垣が取れ
育ち行くおイタを止めもせで笑ひ
博士のも藪のも同じ水藥
女店員何んにも買わず見つめられ
男女同権尻に敷かれるのを逃れ
愛情の問題ですと足を組み
愛情も薄れ笑わぬ日が続き
すぐ年を言われさゝやく恋もなし

尼崎市　水谷鮎美

舞台裏岩がうつかり輕るすぎる
今日休む筈を無口のまだ言はず

出雲川柳大会に臨む

初対面もう祝宴は安來節
痩つぽのうしろ姿にある氣骨

京都市　村松夢裡

ゴシツプを氣にして妻の顔をみる
秋の風さらりじゆばんの襟を搔き
言へない事を言つて呉れたで別れる氣
抵抗の無い自然さの唇を吸ひ

大阪市　西尾栞

クリーニング屋あんな奥さん慾しいなり
口説かねば口説かぬでひがむ未亡人
酢昆布の匂ひで妻にさゝやかれ
四十の恋は手形を割つて会ひ
本氣にするぜと男の嬉しそう
後の喧嘩先するとは貸さぬなり

布哇　市岡曉舟

力んでた事の半分口に出す

秀才も血色悪いに氣が付かず
白人のやたら握手で時間経ち

大阪市　市場沒食子

立呑みの連れだがはてな名を知らず
落ちぶれた元の家主と立話し
競賣へ立合ふ税吏にくにくし
看護婦長そろ〳〵恋に生んとす

名古屋市　吉田水車

老人の日済むとトタンに席がなし
一つべんに通らぬ針を淋しみぬ
虹の下くぐつてくれと子がねだり
出で湯から少し氣兼な便りをし

大阪市　須崎豆秋

パチンコの玉さへまゝにならぬ世ぞ
税金をしぼられに生れ來たような
轢かれてもいゝぞと思ふ年の暮
よう落とすばかりで拾つたこともなく
十一月三日もおしめ翻がへし
元朝の避雷針から光り出し
祭々かまぼこ祭すし祭
いんちきな平和で耳がタコになり

大阪市　竹内潮花

恐しや子供も金のことを言ふ
旦那ともいろともつかずころげ込み
驛の灯で逢へば高飛びしそうなり
くしやみした様な顔でも旦那はん
金蓄めて三面記事を寒う見る
春日野や鶴田が好きでまだ嫁かず
稽古屋へ今宵和服の婦長さま

大阪市　北川春巣

ハイヒールゆつくり驛の段を下り
小男の宿のどてらへ手もつけず
駅前の新築歯科医越して來る

溫泉で見れば名士のやせている
招待の歌舞伎の隅で胃散服む

美秋君の結婚を祝う

相性の通りはこんだお目出度さ
母ちやんの口にもはいるおやつ買ひ
遊覽船アベック組はあつち向き
文化住宅とや云はむひと間なり

奈良縣　尾崎方正

下関市　櫻川不水

発憤もいゝが妻子をみんなすて
いゝ度胸白日の下強盗す
鰭酒へ來れば妓は身を構え
かびのある餅書留で届けられ

岡山縣　逸見灯竿

大阪市　德永雅美

路郎先生へ一句

翁は筆をとり媼は雲をみる

近況

晩酌に一食抜いた頃想ふ
ハンドバック貞操賣つた金も入れ
稽古屋でたつた一人の男弟子

大阪市　水谷竹莊

試驗ばやり

ふぐ料理あんた試驗を受けたんか
嫉妬すら感ぜず二号に甘んじて
子を二人お風呂に入れて風邪を引き

下関市　弘津柳慶

鳥取市　杉谷湖山

父と母恋し合つてたとも言はず
割箸が折れてへんくつまた曲り
暮しとは別に大きな菊が咲き

下関市　國弘半休門

娘の旅行母サービスのありつたけ
アベックと知つてか犬も吠えぬなり
上役を三振させた草野球

兵庫縣　小西無鬼

泊り込む肚は座敷を替えて飲み
子をあやすのに泣く眞似までをして

甥の結婚

人生え二人三脚用意ドン

尼崎市　小林文月

五年振りなお課長さんと呼ばれける
姙娠中絶その名はとても立派だが
そこまで來たと一ばい飲んで行き

大阪市　渡辺孫拙

読書週間チヤタレー夫人健在か
せのびして顔だけ写つた卒業生
内職をさせるがための嫁となり
御茶の会あとはダンスで入り乱れ

大阪市　富岡淡舟

城崎温泉風景

どてら着て城崎の灯をのし歩き
正直に生きんとすれど税迫る

奈良縣　飯降白香

はし筋を新婚の生徒とすれちがひ
小学生源氏マチスを話題とし

奈良縣　西辻竹青

吉報は電話口でもお辞儀して

初孫出生

ちいさんと言はれ笑うても居れず

山口縣　長野井蛙

裏口の儲で老舗支えられ
夏の汗知らず銀飯だけ嫉み
特價品今賣切れたように書き
無口にもあんな不平の言える酒

大阪市　上田春柳

七五三赤いしごきがうれしいね
印捺しに廻つてゐます警羅さん

大阪市　麻生梨里

夜ひとりおとぎ話の國に居た
うぬぼれるだけの強さが欲しいのよ
病人を見舞へば裏の畑に立ち
さうですか変死ですかと乘り出して
極樂に行くならむ秋晴れに靈柩車
それが人生ですよとそつ氣なく
月なんぞ出よが曇ろがアプレ型
ドラマティックに話して女ひまが要り

大阪市　太田良子

世帯じみ同窓会にも遠ざかり
呑んだとは云へず落したとも云へず

大阪市　松江梅里

女には女の意地がと吐かしたり
冗談でなしあの齡で娶る氣か
狭まくともものおこりは四畳半
夜が明けて拗ねた時間が惜しくなり
アベックの隣りで映画身に入らず

岡山縣　丸山弓削平

子が無くて夫炬燵で欠伸をし
中途から傑作だけを見て済ませ
アルバイトいつか闇屋の顔になり

岡山縣　直原七面山

突然のお越しでと二号あわてゝい
パン〳〵のあぶれてくゞる縄のれん
思ひ違いされた様な娘の返事
默つては嫁けぬお方が一人あり
吊る首にしては可細き首なりき
辞める氣の男の言葉荒々し

どぶさらいしてでも生きて行き度いよ
宇部市　上林粗影

むべなるかな金で糸引くあの出世
かまきりがこんなに面白い故郷の秋
女三人化粧品に結論を見す
不氣嫌な父と他人めいて來る夕餉
松茸の匂ひを嗅されて賄費又騰り
百円の借にこだわらず子に柿を與れ
大阪市　西森花村

人権にあこがれ給ふ日もあらん
厭世心彼女があくびしたからさ
ボーナスの記事目ざとくも妻は読み
鳥取市　河村日満子

渡米してからネクタイに朱がまじり
まあ順序だからと悔み輕う言い
兵庫縣　田代尋四

先輩の子にも敬意を表しとき
腹の立つなぜ好きですとよう言はぬ
純な顔あれで彼氏が二三人
お茶ですと出されて帰る千鳥足
キッスだけで釣られてるのに氣がつかず
彼女ありと知らず貞女の手の太さ
兵庫縣　家沢薺花

時計屋の全財産をガラス張り
お父ちやんと呼んだりあなたとゆてみたり
すぐ離婚しそうにスター結婚し
また女やと言う姑も女なり
嫁きおくれ満で云ふても追つつかず
簡單に葉書は二倍半となり
おそくなる電話会社とちがふ声
滋賀縣　黄瀬美秋

新婚へ遠慮会釈もなく集金
持つて廻れば番傘の重いこと
岡山市　藤本満年

かつぎ屋の春遠からず近からず
修学の客は襖をはずされる
満月と知らずナショナル借りて來る
熊本縣　西口如川

はゞたいて見たいな秋の空高く
醉つた瞳も乳房の線を見逃さず
堕胎などもう常識になつちまい
徳島縣　姫田夕鐘

壁張りはじよるり本の恋の部屋
惚れてゐるしようこしこたま呑まさない
未來の歌手たらん便所でも唄ひ
貸した弱身が炭焼小屋を訪ひ
岡山縣　福島鉄兒

ぶさいくに生んで貰うて恙なし
脊に腹は変えられぬ夜の帶をとき
いづれ又戻る心を待ちつゞけ
岡山市　藤本茶々

えらい人やそうなで誓文拂すみ
この手紙こゝらで居眠りしたんだな
大阪市　福本鬩骨

生きるためにはもつと卑怯になれと蜘蛛
菊活けて女は秋の精となり
ガードくゞればさむきガスタンク
兵庫縣　榎南夏六

階段を社長一杯に下りて來る
合図をしたらペカンコされにけり
まきぞえで尻餅一つ突いたゞけ
大阪市　西いわを

パチンコ屋めあてに宅は判りよし
虫すかん言ふて連れ添ふ二十年
南天の赤さと三人の唇の紅
ころぶかと思ふおじぎを繰返し
岡山縣　高山朗笑

柿へつて〳〵祭の子供來る
安住を求めて栗の落にけり
今見れば入江の秋は島ばかり
寒い朝髭のやけたる猫が來る
岡山縣　服部十九平

正直に言ふて損したなと思ひ
冬仕度オンス・ヤールで買はされる
公金消費最初は返す氣で使ひ
純綿の紺ののれんにある魅力
岡山縣　大森嬰句樂

退職の好期を狙ふ歳になり
足元を見た算盤は取合はず
蠟燭も用意してある宿につき
御座敷は正月餅が占領し
女房が餅粉を頬につけて揉み
呑み助と言ふ筆跡で來る賀狀
漫才は幕へおかしさまだ残し
尼崎市　長谷川三司

清元で暮らすたつきの露路に住み
貞操をかけるマダムの强氣なり
酒に飽き女に飽いたどろろ汁
熊本縣　成瀬月仙

今日は佳き日ぞ税務署素通りす
賞金に幾らか足して祝ふなり
配達夫遺書と知らずになげこんだ
谷一つ向ふの里は秋祭
笑い声父がかへつた声で消え

汽車が來たついでに工夫火を点ける
兵庫縣　若林草右

御自慢の電車が燃える展示会
連休の人出のどこに生活苦
大阪市　足立春雄

それ〴〵に何か言つてる幼稚園
大牟田　中村五醉

本妻のなやみは二号にもわかり
ひと好きのする受附の低い鼻
ネオンの灯昔狐の出たところ
口笛吹く若さもあつた給料日
宿帳へ明日は心中する名前
熊本縣　有働芳仙

差水を金魚末期に飲んで死に
お客から女將白髪を見つけられ
嫉妬の妻へ嘘言う日の多く
人工雨御苦労でした空が晴れ
香川縣　大西迷窓

一人子へ夫婦ではさむ檢温器
医学博士母のまじないには素直
岡山市　延永忠美

スタンドを二つに割つたホームラン
大阪市　浜畑胡蝶

パチンコのとりこになつた折鞄
三十になつての派手が哀れなり
下関市　石川侃流

鞄持つた方を娼婦はつけねらい
吹殼がゆんべの出來事語つてゐ
大阪市　安岡珊枝郎

平服となれば巡査も左行く
学生の修学旅行を見て

此の中で何人何になるだらう
岡山市　大倉四案

忘年会その失言を根に持たれ
十二月前金切れの雜誌來る
顔とやら都計の道を曲げさせる
勇退と言うはホコリの出そうな身
廣島縣　山田季養

算盤が合はぬ月末すき間風
久しぶりやつぱり二階に居るのかと
岡山縣　水田草骨

チツブちと足らないような礼を言ひ
恋しさを蓄めて旅から戻つて來
手を握る爲に映画へ連れて來て
玉野市　中村たゞみ

意地悪と俺には言つてくれぬ処女
不甲斐なく十年勤続賞を受け
じゝむさいなどゝ言はれていゝ旦那
三日目は配給米の晉でなし
性慾りもなく利子拂ふ年の暮
結末のつかぬ恋あり年の暮
大阪市　山本葉光

徹夜だと言へば麻雀かと笑い
何もかも老衰にして医者苦し
慾のない老母に炬燵があるばかり
大阪市　東喜久堂

吊皮へ並ぶひゞの手ダイヤの手
強たかに義足に踏まれ恐縮す
一日で文化バッヂの足がとれ
傲慢な税吏見事に誤魔化され
行く当があるかの如く犬急ぐ

大阪市　表天貧

よく笑う子で子嫌ひも抱いてくれ
裏店に住んで大望未だ捨てず
岡山縣　木村千代男

袖の下鼻糞ほども利かぬとか
直感の鋭い人で寄りつけず
わからぬと決めてピカソを見損じる
岡山縣　田垣方大

男親氣をつかい過ぎ嫌はれる
驚きは酌ですまないことを聞き
十八貫社長の前でみじめなり
石川縣　野村味平

学用品一つのつもり手内職
どちらも買つて戻る共稼ぎ
石川縣　那谷光郎

愛孫かと言はれて孫をもてあまし
委員会何だかんだと呑む話
再起せよとは老骨にむちうてか
大阪市　麻生葭乃

水蓮の如く淋しく思索せむ
夫人夫人と云はれ個性のないくらし

作家水谷鮎美を論ず

福田山雨楼

(一)緒言

花形作家の名声は概ね短いのが通例である。ところがその例外に名作家水谷鮎美氏がある。彼氏の評判は全國的に拡がつており、人氣は上昇線をたどつて止まない。これは彼の作品が高評であることと共に、その人柄、人徳に負うところが多い。仕事には熱心、友情に敦く温和でスマートで一点の非の打ちどころのない好人物である。このことは自分のように十数年も遠く離れて彼氏の声望を遙察しているものにもよくわかる。まして関西にあつて絶えず接触されている川柳家諸兄には想像以上の近親感を以て迎えられ、結ばれていることであろう。まことに彼氏は人物評論の対象として、作家論の素材として得難き存在であると思う。既に二十年前松丘町二氏は「作家鮎美」と題し本誌(昭和六年二月号)に月旦を発表したのであつたが、鮎美氏はその当時から柳壇の嘱目を集めたキリン兒であつた。町二氏はその後自由律や俳句に走り、遂に川柳を捨て去つたようであるが、それに引かえ鮎美氏が益々円熟の境地を示しつゝ、大いに柳魂を昂揚していることは、成々流轉の相と考え合せて感慨無量なものがある。

(二)柳魂とは何か

鮎美氏が柳魂をふりかざし始めたのは何時の頃からか知らぬが、本誌では昨年五月号の座談——川柳航路——に始めてその言葉が出ているようである。尤も鮎美氏は「柳心合掌」とか「詩魂」とか云う言葉は既に昭和八年の頃からよく語られていたようである

同氏は柳魂についてこう語つている。「柳魂は本当に川柳にひたむきな人間、訳して川柳に生きている人間、ここう云う事が言える。我々はそうした人間でなくてはいかん柳魂は結局一社を支持するということによつて最もクローズアップされ、柳魂は新たなる人世を作つているということを僕は言いたい」言葉は簡潔であるがその氣持はわかる。そしてこうした氣持は独り鮎美氏だけの独占物ではなく、およそ川柳に情熱を傾けつくしているものはいづれもみな持つているものである。しかし現実的にはその量と長さ(持続力)が問題なのである。一時的に華やかでも線香花火でははかない。その点鮎美氏のそれは年期が入つている。実行力が伴つている。柳魂と云う言葉がぴつたり身についている。だから同氏の口から柳魂が叫ばれても少しも不自然さがなく、素直に感銘的に受取れるのである。例へば路郎先生の説かれた「一句をのこせ」「いのちある句を創れ」の言葉を信奉している鮎美氏のそれを布えんする言葉にも、以心傳心的に川柳に対決する心持が表われていて、両者の血の流れが脈々と感じられるのである。

柳魂をしかし今少しく解剖して見たい。自分はかつて「イデオロギー川柳は不可であるが、川柳イデオロギーは持ちたい」と述べたことがある。緑雨氏が川柳雑誌社の中核となつて献身的努力を盡された頃である。同氏は強じんな川柳雑誌社イデオロギーを以て日夜闘かわれた。路郎先生の叡智と情熱をそのまゝ両手に享けて緑雨氏は健闘された。彼氏の一歩々々に火華が散つていた。自分は当時のことを憶うと今でも眼がしらが熱くなるが、当時鈍感な自分も「これだッ」とある覚りをひらいたのであつた。自分は路郎先生と緑雨氏から無形の輸血を受けてよみがえつたのである。ぴたむきに川柳に生きる人間となれたのであつた。川柳を単なる滑稽視、駄洒落視、遊戯視することなく、血の通つた新鮮な作品を生まねばならぬことにめざめたのであつた。そして緑雨氏らのき尾に付して奪闘したのであつたが、自分の柳魂を果していくばくの人に傳えたかを回想すると、恥かしながら寂しさが先に立つのである。即ち柳魂の以心傳心はつけ焼刃ではダメで、柿の継木がのびるような生命のやりとりでなくてはならぬことを覚るべきである。これは余談であるが、川柳の文学理論もとより必要であるが、あまりこれを押賣りすると作家本位のものは逃げてしまうと云う悲劇もある。

柳魂は大和魂がそうであつたように、負けじ魂と云う一面がある。或る人が藝術とは怒りであると主張したことがあるが、川柳えの闘志にも一種の怒りを含むことがある。勿論この場合闘志とは単に作句することのみを云うのではなく、川柳の向上進歩全体に対する働きである。厳しすぎるほどの負けじ魂、氣魄をもつてかからなくては柳壇は決して進展しないのだ。この頃は路郎先生も非常に円熟されて、街の良寛を憶うような慈光にあふれていられるが、先生がその三十年計画の達成に忠実な行動をされていた当時は、触るれば斬れるような、にがり切つたはげしい表情を湛えていられたものだ。そして今もなお路郎先生の柳魂には、妥協や惰力を嫌う旺盛な氣魄がみなぎつていることを信ずる。

柳魂の習性としてたゆまざる鍛練と云うことが必要である。七十幾才かの三船十段は今でも講道館でわい者相手に鍛練を続けていられると云う。毎月本誌で路郎先生の動靜をうかがつて見ると、よくあれだけの健闘を続けられるものと驚嘆の外はない。俗諺

に「三つ児の魂百まで」と云うことがあるが、柳魂は百まで磨かねばならぬ。

それでは柳魂は如何にして培うべきであるか。自分はここで三つの提言を試みて見たい。それは一、あくまで藝術本來の表現慾をあふり立て創作意慾を旺盛にすること。二、環境と生活内容を改善し川柳のため働き易い体制をつくり上げること。三、現在の柳壇組織を統合強化しその発言力、社会影響度を高めるよう協力すること。である。偶然かも知らぬが鮎美氏の場合、この三者は先驗的と云ていゝほど身についている。同氏がよく柔にして剛、優にして直なる所以である。

柳魂を印象的に色を以てたとえて見よう。路郎先生は銀色、葭乃女史は雪のようで暖か味があり、緑雨氏は黒光りがしている。そして鮎美氏は椿のように赤く豊かである。

(三) 鮎美氏の作品傾向

所謂鮎美調の代表的なものとしてはロマンチックであることだ。著名な数句を拾つて見ると

いつしんに恋を守つて湯ざめする

さびしくも父は枕をおちてゐる

月の出をまてば笛さへなるもの

君雲を話す心になり給へ

さびしさのあまりにながき葱坊主

などが光つている。次に魂と云う言葉を使つた句が割に多いから数句をあげる。

魂を酒連れだつて何処へ行く

幸運のその魂は創らざり

ろうそくの光りにみゆる魂よ

堀下げてはいるが、まだ甘さが残つている。これは鮎美氏の性格が明朗で円満なところに由縁するのかも知れない。が何よりも氏がロマンを好む詩人である証左であつて、そのカラー持ち味は随時随所に発散されるのである。

同舟近詠

温泉情緒小野佐世男の女行く　松山　前田伍健

自働秤力んで見ても正直な　東京　冨士野鞍馬

江戸っ子も老いては炬燵買つてくる

千円札掏られてからの入れどころ

叱られてるような甥堂回顧録　姫路　池沢樂居

末の子が一粒種になつて老ゆ

英霊はなまなか遺骨無くてよし　大阪　橋本緑雨

千日で後からおどす娘に出遇い

元日の箸紙ほこり始なり

忙しさ社印を捺すにも立つたまゝ

大社詣りで雨傘が一つふえ

古木君の結婚を祝う

おもしろき夜の魂が飛び込んだ

掌のなかの子の魂を尊べり

屋根のおもみに耐ゆる魂

七夕七回忌

子沢山なら霊魂の流ぶべき

これらの句は思索的に相当善人の句も氏が好んでものされるところであつて月評で大分問題になつたことがある

善人の妻一ぜん飯の朝

善人の妻で今日も暮れてゐる

善人のまうへを渡り鳥が去ぬ

心おきへて善人に近くなり

善人にすぐれてあをき松の風

善人のとことんまでの不倖

しまひ風呂善人の首一つ浮き

「善い日、善い夜、すべてに感謝して善い人は静かに眠る」と云つた言葉を鮎美氏はしみじみのべられたことがあるが、素朴にして清純な氏の人生観の一端がうかがわれる。そしてこれは生えぬきの大阪ッ子である氏として珍らしく儒教的な響きを持つが、大阪文化の基調に儒教が潜在していることを自分は信ずる。これら一句々々については批判の余地があるが全体を流れるヒューマニズムには親しまれる。

「句に必ず美をプラスしたいのが私の態度です」と鮎美氏は語つているが、ロマンと繊細な技巧を通じて美しく自然と人生を伴奏した句が尠くない。

灯を消せば枕は流れて仕舞うなり

良き心花を忘れてゐたりけり

泡白く生れる畫のおかみさん

めだかの列の雲を逆のぼり

いちぐくの日向に枝は川のうへ

合掌の膝にも雲に似たるもの

岩鄙蹋お不動さまの上に咲き

科白にもないうつくしき心の燈

川柳の場合善なるが故に、眞なるが故に美感をそそる句が多い。しかし本道はあくまで美に参入することでなくてはならぬ。おかしみを通じて表白されたる十七音美、これが川柳なのである。右の内お不動さまの句など川柳の眞髄に触れたほほえみを禁ずることができない。技巧と云う点ではさすがに練達の名作家、鮎美氏ならではとうなづかせる句が枚挙に遑がない。

噛み切れぬものに乞食の歯を見せる

寂光へするどく笑ふ仏さま

情心に風のなかをまつしぐら

心太を開に捨てたる凡夫かな

恩讐は彼方へ消えて風の影

たねなすびまどろむあきのふかかりき

濁流へろうそくの灯の片ちびり

金策の顔が歪んだ回んだ

だいにこう柳の枝をみて暮し

技巧についてはこれまで半文銭氏がよく論じられ、また神韻的な句をものされたが妙に堅く冷たい感じを受けた。鮎美氏の技巧は軟らかく温かくうまみで包んでいるようだ。これは詩人的資質が正直に顔を出すのであろう。

句会における鮎美氏の活躍はめざましく、昭和二十五年度中優勝三回に及び本社から表彰されカップを獲得された。正に横綱の貫録である。が自分はここに驚くべき事実を発見した。それは氏に天位に入つた句が非常に多く、しかも優れた句であることだ。

数多い天の句の中から若干拾い上げる。

まちないのお寺が知れぬ尼ケ崎
神様を信じて裸婦は寢そべりぬ
父の影子の影鶴の影もよし
幻は消へて欄間の佛達
涼み舟ゆれてるまゝに手を叩き
大晦日上唇がかはいてゐ
我が委善い事をした影になり
君雲を話す心になり給へ
お光りが壁で曲つた阿彌陀さま
某月某日博士ぬけ毛を矣ふなり
散髪をして男前悔みに來
神棚へ正直すぎた父の悔ひ

句会と云うところは作句道場であつて、多勢の競合する雰囲氣の中で一題毎に優勝を爭うのは、出席せぬものには測り知れない醍醐味である。練習などと云うのは初歩のときで年期を入れたものには眞剣勝負である。句会一本鎗は考えものであるが句会を輕視することは川柳を輕視することである。闘將鮎美氏の出陣は句会の空氣を重からしめ、且つやわらげつゝその收獲を豊かにすることにおいて、今後益々重鎭の名を恣ままにするであろう。

(四) 鮎美氏の盲点

正宗白鳥の文藝時評を読むと随分悪口が書いてある。所謂年寄の冷や水と云う奴だがむしろ毒舌と云つた方が当つていよう。自分はこゝで毒舌をふるう氣持は更にないが、作家論としての公正を期するためいささか忠言を試みたい。勿論親愛なる鮎美氏に対してあれこれ苦言を呈することの非礼は、充分わきまえているので私信に委ねるようなことは一切ぬきにして、公論的な普遍性を帶びた一、二の事柄についてのべる。でもそう開き直ると云うべきことも云えないので、阪神の三階でコーヒーでも飲みながら対談しているつもりになつて話しかけたいと思う。

鮎美さんには生活の句が少いと思いますね。職場や勤労や應接面を通じての体験があまり作品に表われていないようです。勿論生活と云つてもその範囲は廣く、余暇の寛ろぎや家庭の團らん、趣味の手すさびや、読書、睡眠、病氣にかかることも生活の一部ですが、われわれはこれを如何によりよく生きるかについて、たえず知性と情操とを働かせて磨いているわけです。そうした中から生れてくる川柳素描は即ち生活句となつて時代の脚光を浴び、一面社会批判への警鐘を鳴らすことでありましよう。鮎美氏は年既に五十一才、すべての方面で安定した生活を営んでいられ、人生經驗において充分の修業を積んでいられる。しかも情感豊かな近代詩人、毎月われわれの讃嘆をおしまない生活句が生れぬことこそ不思議である。氏は決して怠惰な川柳家ではない。昭和十七年の頃「十五ケ年間の作句精進四六〇八句の内云々」とのべていられる。常に腕が鳴つている氏である。どうか今迄の作品傾向に輪をかけて、生活の句、勤労の句、警世の句をどし〳〵発表せられんことを祈つて止みません。しかし必ずしも多作を望むものではありません。達吟家は無意識の内に多作に傾き多收獲を誇ります。米穀は増收に越したことはありませんが、詩は量より質です。氏はここらで一轉機を画され、月々珠玉の句をものされるよう精進を新たにされたいものであります。吟行や劇、映画、小集、対座吟等等元より結構で、これによつて指導され、はげまされる新進の数は決して尠くないのでありましよう。しかしそれらが万一にも雲となり雨となつてさんさんたる太陽の光りをさえぎることのないよう切望して止みません。

(五) 結論

柳歴二十六年、路郎門切つての俊才である鮎美氏の評論感想を、昔に遡つて繙いて見たが、戰前月評、座談会にしばしば顔を出された外は、これと云う文献が見当らなかつた。一度口を開けば辷るような快調で論じられるのに、これはまたどうしたことかと不審に思つたが、その答は毎月欠かすことのなかつた「川柳塔」の発表句数が物語つてくれた。実に精進、熱心そのものであつた。しかも月毎に新鮮な句がならべられ、自分は今更ながら頭が下つた。

路郎先生はこれまで実に多くの秀才を育ててこられた。が下手に理論に走つたものは大成しなかつた。どこまでも先生に体当りして作品本位に精進された作家は、今尚名作家として輝いている。鮎美氏はその随一と云わぬまでも有数なる存在であることはぜん言を要しない。氏は芝居を好まるるが、亡くなつた鴈治郎や延若、五郎などの至藝は人一倍よく知つていらるゝ筈、どうか氏よ、今後一層柳魂をふるい起して、これらの名人に負けぬよう磨きをかけていただきたい。

謹賀新春

一九五二年の新春を迎え柳人諸氏の多幸を祈る

川柳雜誌社

麻生路郎
麻生茛乃
麻生梨里
麻生POE

中島生々庵
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

戸倉普天
兵庫縣氷上郡沼貫村小野

詠史川柳

にっぽん (15)

戸田古方

近代社会 (4) (二十世紀)

(三一) 大陸侵略
小さいながらもたのしい我が家ということは日本人には考えられそうもない。明治以來強氣一方で來ておるものだからこの解決は弱肉強食で正当すけるより外の事は知らない。滿洲から北支、中支、南支、佛印へと魔手はひろがる。

不拡大なんて長袖流のこと
クーニヤンのまなじり裂ける妻
畑

(三二) ちよん髷同盟
似たもの同志の独伊と好トリオを形づくり、三國同盟まで押し進める。これは正にやくざ渡世の撲り込み同盟である。すでにヨーロッパではその活動がはじまつて第二次大戰となつている。

ナチス式の乱が東條してみたし
増産のカーブを否定しつゞける
少うしはいつでも勝つたことにして

(三三) 非太平洋
天狗の鼻はのび切つた。矢でも鉄砲でもと米英相手にだまし打ちでそのきつかけを作る。末吉はアメリカの定石である、緒戰のいゝ氣は正に向うの思う壺。日本史はじまつて以來はじめてという敗戰に終る。

ゲートルのまんまシラミというを知り
虚脱した頭の上の焼夷弾

(三四) 浚　闕
青いお目々のアメリカの兵隊が進駐して來た時はびくびくしたものだが、彼等は日本を民主主義の國にするために次々と必要な政策を行つていつた。軍閥、財閥の解体、戰犯の処置、不在地主の追放等で人民は解放されていつた。

いちばん小さい子にくれるガム
追放の決定机整理する

(三五) デモクラシイ
三十年前大正から昭和にかけてはアメリカ化ということに不快の念をもつた人もこんどは眞劍に之を見直した。好むと好まざるとにかゝわらずデモクラシイを根底から勉強した。新憲法はこうして出來上つた。

結局は自覚するまでもつて行こ
実物教育批判の余地をはさませず
六三制中学らしい語もつかい

(三六) 日本人
フランス革命にも独立戰爭や南北戰爭にも自由のための血は流れた。太平洋戰爭の犠牲に対してそう呼べるかもしれない。だが日本の場合は受身であり据え膳である。この御馳走が日本人の口に合うことを望むや切なるものがある未帰還の子の事だけが氣にかゝり
天皇の影までうすくしてしまい

(三七) 冷い戰爭
ヴエルサイユ講和は終戰の翌年であつた。今度は六年もたつている。それは米ソ対立のためである。

肚の肚さぐり合ひすることになれ
宣傳を鵜呑みにされるのがこわし
どちらから見ても神話の如く見え

(三八) マックアーサー元帥
太平洋戰爭のはじめマニラから濠洲へおちていつた元帥を笑つた日本人の前へ最高の地位でのぞんだ。そして猪武者必ずしも偉人でないことを知らしめた。敗戰日本の「幼年期」のよき保護者が講和をまたずして帰國されたことを誰もが悲しんだ。

さすがアメリカ軍人らしい顔でなし
あつさりとした解任も向う式

(三九) 朝　鮮
冷たい戰爭はいつまでも冷たくなかつた。三十八度線に噴いた火はちよつぴり溫い戰爭にしてしまつた。停戰協定の成立をみんなが待ちのぞんでいる。

李承晩へ元帥の手が大きすぎ
きぬた打つ音もとだえて戰車ゆく
朝鮮ブームさあ金へんだ糸へんだ

(四十) 講　和
日本が一人前になる講和を待ち望まないものがあろうか、講和後に來る茨の道こそ日本人を日本人たらしめる試煉であると覚悟して。

和解の講和ということにする苦労人
幸先のよい雲全機出発す
講和全機出発の日稿了
一九五一・八・三一

一品料理と生そば
グリル　芝鶴
上六キヤピトル映画館東三軒目

川柳雜誌社
北大阪支部
謹賀新春
戸田古方　荒木哲水
水谷鮎美　表天貧
黒川紫香　村上ゆずる
正本水客　今西皷愁
竹内潮花　竹田圭三
阿万々滴　小池成男
間島青丹子　田中吟嘩
野本呑水　木村水堂
長谷川三司　永田六竜子
西森花村　永田とし子
新川博也　永田里十九
石岡正司　武部香林
大阪市東淀川区三津屋北通四ノ二九

近作柳樽

路郎選

口開けばおよそうつらぬア・ラ・モード　大阪市　麻生ＰＯＥ
コスチューム着替えるようにハズをかえ　同
ナンバーワンに退められマスター折れてゐる　同
喋りたくつて〜私女給をしてるのよ　同
最後まで予算がないで押すつもり　同
兒を五人前後左右に里帰り　姫路市　小畑自由朗
米麦の人種に日本割れんとす　同
コスモスがゆれて蟷螂勘を立て　同
アベックがうちのコスモス千切ったり　同

銀行風景（銀行生活二十年）

着飾つて來たは預金を出すお客　鳥取市　森本法泉子
貸付がもみ手で出るは断る氣　同
銀行は疑い拔いた上で貸し　同
出納の隅で胃散をのんでいる　同
女事務サイダーが出て不足がり　兵庫縣　酒井ひかる
自宅には課長に負けぬ菊を置き　同
北風に押され闇屋が引かれ行き　同
幸運は霧にまぎれて闇屋逃げ　同　滝　純香
一泊の予定に妻の荷が嵩み　ハワイ　同
兄弟も居るに他人に相談し　同
五万弗あると云ふのに淋しがり　同
贈賄が少な過ぎてか檢挙され　同
チンドン屋時代おくれの唄ばかり　東京都　田中　稲水
君と僕対角線の花を見る　同
秋晴れへ筑波赤城が見えるビル　同
予備隊も女一人に見くびられ　同
日雇もストの権利は捨てゝいず　廣島市　福岡葉留路
親だけで別居出來ない子沢山　同
土いぢるのも今日限りバージ解く　同

十月廿四日長女誕生

もうよいと云うまで襖越しに聞き　東京都　石居　高志
右往左往してゐる中に生れけり　同
朝の陽を浴びて産婆を送り出し　同
税務署へ女將脂粉の香を残し　岡山縣　岡田　夜潮
臭れもせぬ隣の柿の落葉來る　同
三味線の稽古へ集配投げて去に　同
金で済む事へ金持座られる　長野縣　高峰　柳兒
子へ孫へ折れず炬燵で口達者　同
零落れた遠縁そゝくさ燒香し　同
何時の間に信号出來たかおこられる　大阪市　三木　泡起
橋筋に押しのけ急ぐ人が居た　同
司会者も大阪時間でやつて來た　同　相原　一善
割勘といつてやりたい妓のお酌　岡山縣　同
貧乏はいやと二号にでもなる氣　同
食へぬとかいつても菊の咲くゆたり　同　秋月　宏方
税務署がいふ程賣つて見たくなり　和歌山　同
干ぶどう思はす様な乳となり　同

長男結婚

もう孫のことなど思う氣の早さ　同
大学へ養子氣兼ねもせず通い　津山市　橋本晴の助
よく泣いた継子が出世しようとは　同
愛の巣は樂し秋刀魚がつゞくとも　同
愛情の密柑の筋をとつてやり　津山市　小島　祝平
懲りたのも忘れ間貸をまた始め　同
病人に羽織を着せる恩があり　同
思ひ出は乘馬の靴よ古い靴　愛媛縣　堀内　曉風
別荘が料亭となる世の移り　同

謹賀新春

南区医師会文化部
杏林川柳会

中島生々庵
木村無名林
河村瑞川
田中鳥耕
牟田一哲
黒木弾正
南　捨舟
長谷川迷路
安岡珊枝郎
海野比呂史
浅野春路
和佐上六

餅撒の大きな奴は見せて撒き　同
忘年会音痴も歌ふトンコ節　東京都　松井　蛙声
全て世の女はにくしコップ酒　同

浅草

ロック座へ見学ですと教師云ひ　同
集金に來れば旅行と言つときな　愛知縣　松尾　北雷
不渡りと知らず何度も頭下げ　同
仲人に握らせたのむ母の情　同
叱つてもくれず泣いてもくれぬ義母　廣島縣　黒本　芳泉
想ふてる人は見舞に來てくれず　同
差押へ母は佛間に行つたきり　同
迷信で片付けられて母不満　出雲市　久家代仕男
紹介に女傑と言はれ淋しがり　同
アベックの胸にも赤い羽根を着け　同
ねもの語りは借の内入　愛媛縣　渡辺　曉童
子供等の話を肩で笑いすぎ　同
取つてつけたお上手大阪弁も入れ　同
氣まぐれに立つたち香具師に買はされた　貝塚市　住谷　石舟
思い出は想い出として嫁くと決め　同
港とは名のみ油が波に浮く　同
絵の中の猿は技から降りられず　岡山市　岩田　柿平
一泊二泊三泊となつた恋　同
銭湯でおしどり夫婦別に浮き　同
子の希望無視して母は買物し　大阪市　西川　惠風
税務署へ遠慮しい〳〵新築し　同
ダンスでも習おうかしら倦怠期　同
銀行へ行けばお札に音があり　大和高田市　岩垣日本村

路郎先生壽像贈呈式に臨みて

先生の壽像の皺も撫でてあげ　同
或る時は妻の平手で押切られ　同
迷夢まださめず本命などと買い　長崎市　北川　史風
教養と別な嫉妬を女する　同
ふみ切の秋をすすきにたそがれて　同
もう一算おけばすむのに停電し　大阪市　佐野　牛歩
パチンコもZゲームも知らず逝き　同
クーポンへ酒は大阪から持參　同
子を生んで女史と云ふ名をもて余し　熊本縣　鹿本　実信
女絵師或る日子供がほしくなり　同
女同志勝手に男料理する　同
自殺までするとは知らず子を叱り　岡山縣　菱川喜代子
ひげ面が一番うまい隠し藝　同
年の暮またのびました嫁き遅れ　同
二三年待つて欲しいと手を逃げる　呉市　松永四季無
飲み残りあるから來いとはられし過ぎ　同
賣れぬからした改造へ税吏の眼　同
文化とは遠く釣瓶で水を汲み　兵庫縣　吉原　紅月
しるこ屋で女ばかりの前祝　同
毒舌も同じ門下で氣に懸けず　同
頭から税吏数字を疑へり　今治市　長野　文庫
佛前でズボンの折目ワヤになり　同
銃口が影から覗く覚書　同
彼女ないのかと附添に侮どられ　貝塚市　上坂　朱人
買うて來て良かつた妻の燥ぎよう　同
手傳うてやれば女は自惚れた　同
甲斐性のありそうなのが皆食えず　愛媛縣　村上　旭童
我が家では余りしやべらぬ話好き　同
家貧にしてがらくたを山とため　同　吉原　紅月
別れ來てこけしも一つこけていた　貝塚市　池崎　箕水
將棋しているに社長が見舞ひに來　同
プラトニックなると甲斐性のないくせに　同
氣の合うた夫婦と思うパチンコ屋　大阪市　西川　一舟
ローソクをつければ夜は尚永く　同
藁灰の残り隣りを呼んでゐる　同
父ちやんがゐて母ちやんが叱る役　京都市　村本　香果
タバコガムタバコと赤い爪いやし　同
十二月三十一日持病出る　同

川雜ハワイ支部

ウイロー社

同人一同

川雜篠山支部

家沢　菁花
堀毛　殘玉
田代　尋四
松尾　壽太郎
前川　初夫
降天　毅久雄
小畠　無聖
小西　無鬼
小林　指月
酒井　ひかる
岸本　梅香
森野　汲流
酒井　和子
酒井　旬士

イロハ順

ゆつくりと〳〵牛峠越す　倉敷市　安原　桂月
我が腕の細さ女の不安がり　同　桂月

私鉄水島線

こゝ切符置いときますよと終列車　大阪市　後藤　志津
一そもう樂しくなるよな嘘をきく　同　志津
悔いのない別れ落葉の音にきく　同
たゞ一人砂丘に恋を捨てに來た　同
台所古りたり妻も蝿入らずも　大牟田　新谷　風浪
食慾をおさえてまでもやせたがり　同　風浪
傾いた家も我が家であるあんど　同
元朝に二階の二人音もせず　大阪市　石田　沐天
ひとり身へ施しほどの餅が出來　同　沐天
三ケ日父は明治の懐古趣味　同　余頃
子が危篤なのに隣のジャズバンド　吳市　余頃
性的魅力だわとはこそばゆし　同　紅兒
集金に行つて内氣な我を知り　同　紅兒
捨てられた女優酒場へカムバック　貝塚市　津田　千舟
日曜も休まぬ恋の定期券　同　千舟

竹莊氏銀婚句集

共白髪あやかるように妻と読み　同
押賣へ膝を折つたは迂濶なり　福岡市　川口　笑諷
角帽を覗けば何の囲碁講座　同　笑諷
靴磨く子等も知つてる労基法　同
轉勤に妻の計劃無惨なり　一宮市　兼元　磊兒
根のついた菊引越しの荷に加えられ　同　磊兒
五十年まだ引越しの苦は止まず　同
青春を包むに少し地味な柄　福岡市　増田　笑星
艶聞もあり横丁のよいマダム　同　笑星
大正の埃もあつた毛糸とく　同
失業の子にまで及ぶ十二月　堺市　八木摩天郎
和歌浦に親類のあり旅うれし　同　八木摩天郎
測量器隣りの地所は賣る氣配　池田市　浅野　清亮
ふるさとは晴れたる下をヂン々行く　同　浅野　清亮

ヌードもう日曜画伯こなしきり　貝塚市　武安　嘉彦
せり市へ母の形見も出す暮し　同　嘉彦
マダムには勝てんと税吏呑むつもり　尼ケ崎　赤木　紅山
それが女の度胸の様に毛糸編む　同　紅山
お隣は花嫁が來ると言ふそうじ　尼ケ崎　徳弘すゝむ
座りたいくせに二ア人ゆずり合ひ　同　徳弘すゝむ
結局は儲ける爲の嘘を云い　石川縣　細呂谷魯木
自惚れを見越して媚る女の術　同　細呂谷魯木
看護婦の親切藥くれただけ　吹田市　橋本　幸男
ニューフェースもう恋人があるらしい　同　橋本　幸男
子が無くて玄人じみる令夫人　高知市　松下一徹郎
運動会子の出る番組だけのぞき　同　松下一徹郎
エロダンス法ぎり〳〵に踊りぬき　石川縣　畝村　夢晴
曉はこんなによいもの汽車の旅　同　畝村　夢晴
娘の聲を何誰と云ふ程老い給ひ　堺市　丹波　太路
老人の日が氣にくわぬ父の酒　同　丹波　太路
奥様も一緒にどうぞと写眞班　石川縣　杉浦　醉羊
許嫁の間は拗ねて見るもよし　同　杉浦　醉羊
秋になる空をみつめて寢てゐたり　奈良縣　石井　伸生
運も亦往復歩くから歩き　同　石井　伸生
自分だけ開いてるらしいねぶかぜし　岡山縣　底谷　若芽
貰う物もらえばとなえすむらしい　同　若芽
若き日はこうもあつたと妻も笑み　石川縣　福　貞人
共稼ぐ子は淋しくも門に立ち　同　福　貞人
病氣してみればやさしい夫なり　今治市　黑川　秀義
マスターの友達女給損な番　同　黑川　秀義
袖の下期限のきれた嫌がらせ　貝塚市　仲田　閑靜
神主は結婚資金貸すと云ひ　同　仲田　閑靜
復員へ牛まで笑顔見せてくれ　岡山縣　浜野　奇童

家畜共養会

一等の牛らし寢るとこまで見られ　同　浜野　奇童
讃美歌は恋の痛手と誰が知ろ　和歌山　浅川　桑南
新顔にもう替つてる駐在所　同　浅川　桑南

謹賀新春

—木朽洞會員—

浜田久米雄
鈴木九坡
大森風來子
直原七面山
服部十九平
大森娛句樂
延永忠美
水田草骨
大倉四案
大森苑女
中村たゞみ
木村千代男
田垣方大
藤本滿年
藤本茶々

川柳雑誌社岡山支部

川雑岡山支部（岡山市下出石六二）◇川雑備前支部（岡山縣和氣郡吉永町淡田久米雑方）◇川雑岡山縣廳支部（岡山縣廳世話課服部十九平氣付）◇川雑岡山大学支部（岡山大学医学部看護学校大森風來子氣付）◇山陽新聞川柳同好会（岡山市山陽新聞延永忠美氣付）◇旭東川柳社（岡山縣上道郡西大寺町鈴木九坡氣付）◇邑久川柳会（岡山縣邑久郡御幸村熊南中学氣付）◇川雑岡山水島グループ（岡山縣児島郡福田町壽町田垣方大氣付）◇玉野川柳会（玉野市日比町、中村たゞみ氣付）

もう他人と歩いて居つたあの女　岡山縣　古賀　陽明
進駐さんを頼んで來うかとは淋し　同　三島　寛造
歯痛をば無理してかせぐ生活向き　倉敷市　同　大塚美能留
あごひげもそつと家業にせいを出し　岡山縣　同　長田　大彦
秋の風嫁のすそから這い上り　ホノルル　同　太田　又洲
頼りなく見える夫の細き脛　岡山縣　同　野村　岬月
未亡人膝の子供に相談し　出雲市　同　井野　格一
十二月旗竿を買ふ氣にもなり　岡山縣　同　青野天下堂
秘書今日は社長が留守で毛糸編む　愛媛縣　同　大橋　游子
無遠慮に食べるお客と知つて出し　岡山縣　同　野田素身郎
市制十周年　同　芝　無骨
敗戰も入れて綴つた出雲市史　出雲市
父ちやんも母ちゃんも留守僕とポチ　岡山縣
青空は好いなと思ふ公休日　岡山縣
豪華バス田舎の町が少さく見え　同
士佐絵にも似た裏山のちら〳〵灯　愛媛縣
天道人を殺ます今年この田のこの穫り　同
抑留の苦労は髭が物語り　岡山縣
まゝごとへ母さんの紅少しへり　同
恋人ができてさつぱりやつて來ず　倉敷市
仲人は多産系とはいわなんだ　同
共産党がいつち嫌いな婦長さん　貝塚市
社会党分裂
割つて見りや黄味が二つある卵　岡山縣　同　田淵　土器
家出した娘が居た〳〵ストリップ　岡山縣　同　上田　耕平
一瞬の思慮が娘を賣つてゐた　同　同　河野　德丸
持てる苦もあり銀行の鉄格子　貝塚市　同　花岡　英子
恋すれば才子も犬の藝に似て　同　同　横田　方眠
コソ泥が女一人に居座れり　岡山縣　同　水谷　谷水
雑草がもう大根をかげにする　同　同　戸田　嘉一
女の氣ふと口ごもるじれつたさ　熊本市　同　三上きんや
まるうつしした恋文を後で知り　同　同　木村　水堂
意氣地なく長いものにはまかれて居　大阪市　同　越智　一水
御詠歌の本ひき出して老夫婦　岡山縣　同　山田　月舟
つぶれても越冬資金はとるとゆう　岡山縣　同　佐久間折草
どん底の生え抜きで知性身につかや　大和高田市　同　安原　玲花
やさがしの迷子婦警の手に抱かれ　同　同　鈴木加代子
散歩する犬くくりつけ野球見る　和歌山　同　由井　冨郎
クーパーのこんな田舎の額にゐる　岡崎　泰三　同　佐々木告天子
記念写眞に生きてゐるのは俺一人　同　同　河楊　梵鐘
キザミ喫む主人でアプレ容れられず　京都市　同　河野　德丸
四十になつて渾名で親しまれ　同　同　渡辺　逸
附合のように單價がはねあがり　大阪市　同　香木凡太郎
批評家のけなす映画でよく儲け　同　同　同
戰爭がオールド・ミスとさせたのよ　今治市　同　小西　雄々
髪の型変えるも妻は意見きゝ　同　同　
寝てゐれば癒る病に冬が來た　貝塚市　同　
御堂筋秋も終りの塵芥になり　同　同　
握る手の冷たさ彼女は二十八　京都市　同　
喰へるまで食つて最後はストリップ　同　同　
人口の過剰へ済まぬ産湯する　倉敷市　同　
慾をみな捨てゝ聖書の頁繰る　同　同　
ほゝづりに愛情がわく夜の母　京都市　同　
首をやる約束をして子は帰り　同　同　
米一升持つて小心氣が疲れ　米子市　同　
トランプは我が順調を占えど　同　同　
鏡ならぬ箪笥から出た内助の手　岡山縣　同　
見合した帰りの雨は苦にならず　同　同　
さよか〳〵と大阪人の社長　貝塚市　同　
神経痛ハハン齢だなと云われ　同　同　
白々と嘘つく顔の彫像に似て　今治市　同　
舌禍々々背負えぬ不幸のしかゝり　同　同　
借金に來ぬを母親もの足らず　大阪市　同　
内職をしてても社長夫人なり　同　同　
艶聞に頭の禿を笑はれる　米子市　同　

川柳日の丸会

鳥取市富安三八〇
日の丸車体工業株式会社

会長　加嶋卜天
河村日満子
田中遊星
岡島芳道
武田粗粒
武田貴美女
城内吾柳
羽野朱雀
福田たかし

烏ケ辻川柳会（イロハ順）

市場浪食子
池戸桃村
井上明欣
橋本幸男
橋本峰春
西川惠風
西辻竹青
若林草右
金森小夜子
吉田斜水
多田禿天
津村神峰
中谷葉栄子
牛田晴夫
尾崎方正
太田良子
山本新陽
藤田眞砂志
小沢史葉
足立春雄
水谷竹莊
森下愛論

看護婦の嘘で安心するベッド　大阪府　同
半タクへ女氣安う乘つて去に　森本黑天子
がら空の電車へ婦警堅う立ち　同
主人より立派な服を着た税吏　高知市　岡本　元馬
秋高し藥屋新聞読み飽きる　同
此の枝についたみの虫尊ばれ　愛媛縣　村上　和子
損得も笑顔もなくて女事務　同
座り込むつもり代表厚着で來　貝塚市　望月　酋魚
赤い手がのびたかストの強硬な　同
教科書に時代のづれを教へられ　愛媛縣　藤田　博人
あつさりと別れて呉れて物足らず　同
友情も恋には果敢なきものだつた　貝塚市　和田　一津
書は事務夜は座敷へアルバイト　同
投資のさうまで荒くしなくても　宮崎市　野口卯之助
いまに見て居れさは云はぬ金を溜め　同　林野しずを
結局は母のがんこに負けて寢る　吳市　同
おみくじは縁談だけを読んですて　同　塩谷三思樓
分担もOK異議なく飲むにきめ　石川縣　同
濡れるにも旅にいる身のいさぎよし　岡山縣　西山　秀峯
叱かつてはみたが婦警も貰い泣き　同　井上　吉造
外聞を捨てて樂しい鍬に馴れ　京都市　同
大それた記事と戰後派写つてる　岡山縣　政田　大介
貰ひ泣く母も不幸な過去を持ち　同
滯納を自慢してゐて押えられ　岡山縣　里田一ン十
名刺下さらないともう惚れる氣か　同
野球選手だけが就職決まつたり　吉屋市　青柳扇子仙
理髪店助手が來てゐる師走月　同
人そしる舌の制御にこころざし　大阪府　吉田　文江
離婚した妻のよしあし言いたもな　同　神辺　操山
赤い羽根二三歩追つてあきらめる　名古屋　岡山縣
うそ泣きもして見たいよな卒業式　岡山縣

自炊した証拠は疊物語り　岡山縣　田村　藤波
母上の便りへ泣いた頃もあり　山口縣　多田　穂波
子の去りし部屋で啄木詩集よみ　岡山縣　田村　竜兒
一日の長さを知つた床の上　大和高田市　戸田　悅子
戰後派は約束なんか知らないわ　岡山縣　梶原　久平
あいびきのおかげ居残り又樂し　富山縣　清水　羅洲
税務署は涙の言い訳聞き入れず　岡山縣　寺本　一歩
四〇にもなつて恋するよ命日に　下関市　原田　眞砂
愛情がとけ込みそうな良い月夜　岡山縣　佐藤千代春
バックミラーに不安がつのる恐い客　玉野市　迫田美婦適
運チャンと愛称で呼ばれあほにされ　大阪市　山崎帆加夫
子に甘い父さん振りの後始末　下関市　伊織　柳坊
まだ持つてるのかとカメラ借られる　京都市　若山　圭草
あらそへぬ顔で落胤露路に住み　岡山縣　峰尾　魚々
威勢よく改築したらパチンコ屋　岡山縣　北口　草人
我が子なら殴つて見たい小兒科医　岡山縣　船曳　呑長
鉛筆へネームを彫つて事務所暇　貝塚市　並木はじめ
ペチャンコの乳では孫は泣きやまず　岡山縣　池田　古心
資本論読めとやつぱり貧と貧　貝塚市　堀井　一峰
あほになれ突然彼は言ひました　大阪市　木村美智子
山羊飼うて一家元氣にお正月　岡山縣　河島　露外
恋人がなくて氣樂な床に臥し　岡山縣　田中　徹貢
來年も生きるつもりの菊の鉢　滋賀縣　土守トン坊
ふぐ料理食べようと云へば手を合せ　京都市　倉田　錦州
キッスシーン悪戯な手が膝へ來る　荒尾市　山崎青粒子
放尿のついでに山の秋を褒め　岐阜市　石神　古木
ドッジ氏來朝
株價まで下げろと俺は云わなんだ　米子市　石尾　鈍頑
女医さんは男好きよと後家の云ひ　山口縣　山田　潮鳴

謹賀新春

南海電鉄川柳部

客員
森本黑天子　後藤梅志　後藤竹石　雨乞いさを　出津野博史　赤松てんを　水本無人　山田烏荘　菅阿形信郎　雪友淵貴山

川柳雑誌社　詫間支部

香川縣三豊郡詫間町　永廣病院内

小川直秀
古谷緑山
細野國定子
竹安秋宝
大西迷窓

川雑八代支部

佐野卜占
八代市本町三丁目

体温川柳会有志

貝塚市名越　千石荘

ベターハーフを語る

「今日からはお前といふぞ俺といふ」（洗塵）と云う句があるが、それは新婚当時のこと、月日が経つにつれて、「オイ」と云つても、アゴをしやくッても、お互いに用が足りるベターハーフとなる。不朽洞会の人達にそのベターハーフを語つてもらつた（編輯局）

医博坂田良坊氏と哲子夫人

美人に屬する

種瓜平

誰でも十才ほど若く言います。これをよい方にとつて美人に屬するとしましよう。君は勿体ない、とよく冷かさたものですが、これほど男性の人格を傷付ける言葉はありません。体は頗る倭小でチリメンジヤコを連想します。非社交的、無愛、無趣味の他に未だ無がつきます。師、母、友、妹の次ぎの婢婦に属し、夜中でも一言で火をおこしたり、食事の用意をしてくれるし、極度の経済的窮乏に面しても亭主に文句を言つたことなく、時節柄かけがえのない有難い女房と思う日と、ムカみたいに思う日があります。

泥々

須崎豆秋

家内が掃いたり拭いたりにかゝつている小綺麗屋なとこへ、私と猫とが頗るルーズと來ているから二人はしよつちゆう叱られ通しです。私が夜おそく燒酎に酔つて帰り、叱られている所へ〝俺に似て猫も毎晩出て歩るき〟の主人公が、のつそりと足を泥々にして帰り合すもんですから、二人は顔を見合わしてニヤーッと笑い合いながら仲よく叱られているんです。

家内は川柳は作りませんが、佳いわるいの選句眼はあるので、よく予選の選者になつて貰います。

他人に渡すのは惜しい

中島生々庵

編輯局からのお葉書を拜見して今更の如くドキリと致しました。二十五年にもなると生年月日は勿論のこと性格やら容貌やらすつかり認識圏外に去つて終つて遠い記憶を呼び戻す様な氣持です。お話にならぬ考証学的存在ですが、ちやと云つて他人に渡すのは惜しい程度。くわしくは「近くばよつて目にも見よ」です。

それわたしのです

浜田久米雄

いつだつたか私の家での句会の晩に、私の選で天位に拔いた句の句主が名乗り出ない。おかしいなあ誰の句だらうとわいわい云っていると、隣の室にうたた寝をしていた妻から眠い声あり「それわたしのです」――というわけで、少しは川柳に趣味があり又川柳句会の世話など氣をつかつてしてくれる。年は三十八、顔は十人なみというところ。子の年だが曲つたことはどんな小さなことでも大嫌い。ちよいちよい痛いところをつくことがある。いまではにわとりを十六羽飼つて卵がなんぼたまつたからと数えているような平凡な日を送つている。

變哲もない

前田伍健

「オイおまえの事をかけと言つて來たよ」と老妻にはがきを見せると、ニヤ〳〵と笑つて居た。私もにや〳〵笑う。わしが女房をほめるじやないがの、越後獅子の文句も今さら一すおかしい。よき老母であり、よき老妻であり、年寄るに従い不自由を扶け合い、我まゝ勝手を素直に受入れてくれる便利なものである。然し変哲もない、針の穴え糸通らぬようになれば、いよ〳〵以つて変哲もない。フト机上の開けて居る本を見ると「市人に交るは山翁を友とするに如かず、朱門に謁するは白屋に親しむに如かず、街談巷語は菅歌牧詠に如かず」如かず〳〵である。これも変哲もない。ベターハーフ変哲も可も不可もない。

奥様はお留守

戸倉普天

本名はつゑ、通称静子、明治十九年十二月十三日煤拂ひの日の生れ、從て氣ぜわしい働き手であります。性格温良容貌頗る美、中肉中背と申して置けば内輪で叱られなくて済みませう。亭主に似て皮肉な言辞を弄する魂は玉に疵とでも申す可きでしよう。生花と茶道の趣味がありますが田舎藝の域を脱しません。手拭を被つて紋平はいて、屋敷廻りで乾し物をしたり、鶏を飼つたり、山羊やアンゴラ兎を愛撫したり、時には畑に出て野菜造りをやつてる様は、すつかり昔の色香褪めてほんとうの百姓のお婆さんに成り切つて居ます。初めて訪う人なぞ何と思うのか「奥様はお在宅ですか？」等と、尋れられて居るのを見掛けます。こんな時には往々にして「御留守で御座います」なぞとやつて居る様子です。今更ら私から老妻への注文なぞありません。

徹底した寫眞嫌い

丸山弓削平

千代子、大正二年生。温順にして明朗、私と共に各地に轉住したが、行く先で心から、姉妹の様につきあう近所の奥さんがきまつて二三人あつたのは底拔けに人が善いからであろう。人が善い丈けに一面頑固さがあつて徹底した写眞嫌いである。私は結婚写眞以外に彼女の写眞を撮ることを一度もなし得なかつた。先日彼女の弟（不朽洞会員小橋隆如）が訪れて、どうしてもカメラの前に立たない彼女を盗み写しにパチリとやつて帰つた。容貌は普通、体格は五尺三寸

十四貫台、川柳を文化運動にする私は、妻にもやつて貰い度いのである、、彼女の写真嫌いと同様にこの注文も到底受入れられる見込みのないことを私はよく知つている。

ハワイ生れの二世

大森風來子

ハワイ生れの二世だが沢山な姉妹の中で一人は内地で教育をしなければという父母の希望で帰国したまま、内地で原爆の洗礼を受け、戦時戦後の苦難の道を歩いて來た一人、その上裸一貫で帰還した薄給のサラリーマンに嫁ぎ、ハワイやアメリカの姉たちと比べて比較にならぬ不幸な道を進んだものだ。趣味といえば読書、ハイキング、川柳です。宮島から廣島までの強歩競争で十年前に一等をかち得たこともあつた。川柳は昭和十四年頃、私と同じ職場にいた時「花子」という柳名で投句したのが始まり、その頃は、私自身かけ出しで指導力もなかつたし、ただユーモアを強調して茶目氣たつぷりの作風であつた。結婚してからは本名「大森よしえ」と名乘つているが、小さい子供の世話に追はれ通しで作句は進まないが、「川柳雜誌」や各地の柳壇、句報など殘らず読んでいて、私自身に対しても仲々手きびしいうるさい批評家である。

机上建築設計家

坂田良坊

一昨年銀婚式を内証でいとも盛大？にすませたばかりです。よくもこんなに長くあきもせずと、ほと〳〵お互に感心してゐます。明治三十六年生れの卯の年、嬉しくも皇后樣と同年、兎の如く從順で平和的であり、至つて呑氣坊である事も僕と正反対である。といふ事は喧嘩にならない珍らしい家庭であるといふ証明？となる。容貌は十人並に入れて貰ひ度し、ヤミ取引きでも結構。よく肥つてゐて皺の出來るすきがない事は特色、趣味と申しては一日中でも読書をする性です。建築設計にこり、文化住宅や文化隠居部屋は一週間位、病院とかアパートになると一ケ月位でどん〳〵建てゝ享んでゐます。御希望の方は御申込み下さい。但しまあ最低建築費として五十万円位で、材料その他はおかまいなしですから、百万——五百万位の所が普通です。お参考までに。何か注文せよとのこと、甘い物なら一日三回食前食後でもいたゞきます。そそれは家内の事ですぞ。私は甘くない方を……

○注文としては　人生邊流風邪ひかぬ事
○感謝　（老妻のベター全部に感謝して）
○女房の袖に隠れて世を諷し　（省二）
○息苦し凡てを棄てゝ妻に依る　（省二）

最上等の御飯好き

蛭子省二

○四月四日生れ五十八歳、潔癖性。
○玉露好き最上等の御飯好き。
○容貌は「女房は道であつては冴えぬもの」（古句）を換骨して「女房は借家にあつては冴えぬもの」

都會への郷愁

服部十九平

昭和三年平壤で医師の次女と平凡な見合結婚。二十才と二十八才——、見合の席へ手を振つて這入つて來た活潑さに合格点を與えた。其後京城、千葉、小倉、奉天、金沢等に住んだこともあるが、大半は東京で暮した。それが戦争中に始めて田舍へ疎開して松根油を採つたり、増産の手傳をしたり、引き続き今でも百姓仕事をしてゐる。此の運命に忍從する頭の切り替え振りはエライとひそかに感心してゐたが、最近の情勢、特にパーヂ解除などの面からして、此の運命子も夫に対し再起の野心を期待してゐるらしい。其れはどうやら郷会への郷愁でもあるらしい。

健康で質素

大西八歩

家内は米の飯と一緒で毎日食べてゐると、その味が良く分らないものです。たまたま外米の入つた飯を食べると日本の米のよさが分つて來ます。パン食も一日や二日はいゝですが、子供の時からいたゞいてゐる米の飯には及ぶべくもありません。僕の妻は健康で質素ですから、多少麦の入つた飯と云ふ所でしよう。とに角一日でも留守だと米の飯と一緒ですから不便至極です。新婚以來拾七年、その間一男一女の父となり母となつて夫婦の味もやゝ分つて來ました。今更妻に対して不平を云つて見ても受けつけても呉れず手おくれでしよう。

世帯持がよい

佐野卜占

生年月日は明治四十年二月二十日、登録台帖は長女のくせにスエノなんてつけられているのも変です性格は強情で意地ッ張り。時時衝突して來ましたが近來大分角が折れて來ました。子供が一人前になつた爲アホらしいて喧嘩も出來ません。

容貌は慾目に見て六点五分と云ふ所。

趣味は別にありません。取り柄としては世帯持がよい位で私のパッパに好いコントロールです。

大の野球好き

大西迷窓

大正八年七月二十一日生れ。ちと泣き虫である。「十字架の映画を好む妻を持ち」。容貌は僕には勿体ない？と言つても美人ではない？僕には勿体ないだけである。趣味はお茶、花、読書、映画、野球、釣。お茶と花は免狀を持つてゐるらしいが、波の音を聞いて暮れて行く片田舍の毎日なので開業してゐません。読書は余程好きらしい。最近は旧元の「川柳雜誌」を読んで僕に意味の解釈を迫ります。映画は半里もある道を「合乘りは先づトラックをやりすごし」の調子で時たま行くので何時も見られる都会が恋しいではないかと思つてゐます。野球は好きで、プロ、高校、僕の野球まで見に來ます。釣は人魚が出そうな岩に立つてこれも一緒です。子供がないのでハッピーといふ小犬も行きます。妻への注文としては、金の足りない月は泣いたりふくれたりしてほしい。

ヒスを起させる型

藤本茶々

産れは明治の終り辰の歳。鼠（私）なんかの立騒ぐ事はとんと無頓着。顔形は何処へ出しても恥しくないと皆さんがおつしやいます。女の喜ぶ贈物など一向に氣がつかず、読書をしだすとヒスを起させる型。此の頃血の氣が少なくなつて我慢強い事は驚く許り、これだけは眞似て見たいが、さあ……

赤ん坊妻

藤本満年

家にあつてはタテのものをヨコにもせぬほどものぐさ野郎の僕であるから、妻は大きな坊やを抱えたほど手の焼けることだらう。その反面、家庭の雜事に追われる妻としては、ゆつくり本を読む暇も

ない。從つて世界觀も社会觀も、僕から見れば、赤ん坊ほど幼稚である。彼女は僕から色々な智識を奪い取ること、恰も月給日に月給袋を收納する權利と同樣に考えている。坊やに赤ん坊の妻、これ似合いの夫妻といわずして何ぞや。

派手なくせに内気

吉田水車

大正四年十二月五日生、芳紀正に三十七才、性格は、派手な所があるくせに至つて内氣。容貌は、まあありふれたもの。趣味はどちらかと言へばクラシック、しかし近頃おそまきながらダンスをやつて居ます。子供がないのでこれが妻への最大の注文、けれ共これは一方的なそしりをまぬがれませんネ。

生れは北海道

國弘半休門

女房と呼ぶようになつて二十年……有難い事だと褒めてやつたところ、最近ちと血圧が高くなりまして、こちらが手を揃り足をさすりしてやらないと眠れないのです。当年四十五才になりますが出生地が北海道の関係上馬にするなら挽馬のところですが、一寸その顔が丸くて馬面とも云えず、この性の動物にはとかくありふれた短身肥大の方で、時折横にころがした方が早い程歩行が下手なのであります。又よそ樣の奥樣には当らないかも知れませんが、この種の女性には趣味なんて奏にする程の持ち合せもありません。

世話女房を自負

東野大八

赤紙が着て出征するその日、いまの女房と結婚した。朝の十一時に式をすませ、午後三時に太原行の汽車に乘つた。負傷して後送となり北京の陸軍病院で二年ぶりにこの新妻と対面した。一心に留守中の話をしている妻に、私がふところ手ばかりしているので、ちやんと手を出してきいてヨ、といつた。二度と私の片袖からはその手が出ないとはツユ知らず―。満足に五体そろつたムコ殿は彼女の場合たつた三時間だけだつたというわけ、結婚前私のことを「オジサン」と彼女は愛称していて、どうしても貴方といえず、赤くなつて困つてばかりいた。人並にやつと「あなた」といえたのは子供が出來たときからである。五つちがいの三十三、ベッテイ・デビイスのまがいもんみたいな顔をしている。世話女房をひどく自負しているがムリもない。こんな丹下右膳の私だからである。

瓜實型の美人

水谷鮎美

昭和四年十一月某日、大阪の樂天地（現在の歌舞伎座）で見合をしました。其折の印象と未だに変つて居りません。瓜実型の美人です。明治四十二年九月五日生れで「猪野カツ」でしたが結婚以來かつ子と呼んでおります。世にかくれたる心妻、添うて二十年、夫婦喧嘩の味を知りません。それ位ですから愚妻だと感じたことはありません。「七人の子は成すとも女に心許すな」なんて諺がありますが丁度七人の子持ち、家族十人暮しですが家庭爭議の起きたこと無しです。それだからと云つて蜜より甘き嘘きもありません。つまりは夫唱婦隨。子供はすく〳〵と成長しております。女權も男權も振り廻さないのですから何は無く共心は樂園です。家庭の灯が何より温いのですから、明朗ですし、嘘がない。だから毎朝のお茶のひとゝきには、老母、妻、私あまりにも世間のアブレに驚くばかりですから成可く世間知らずで生活して居ります。心妻の趣味は私の柳魂をいつもあたゝめてくれてゐることです。寢室は未だに一緒ですからかつ子と呼べば直ぐに「はい」と答てくれます。

長く高女教職に

渡辺孫拙

至烈な空襲で全裸全焼の一家、遁避先苫屋で終戰間際爆碎二度目の罹災が原因で、糟糠の妻を亡した私、漸く光境それでもよく孤独に堪ふる事凡三年。復員帰還後これを見かねた子供等の慫慂と撰択を無下にも拒絶する理由もなく、彼女を後妻として迎へ正式に入籍、日薩者の扱いをせず、今は長男夫婦三孫と同居して以來三年、明治卅四年三月廿四日生、長く高女教職にあつた初婚の姥櫻、容貌は正直の処佳もなく不可もない。性格はスローモーながら一徹者、いきなり違つた環境にとびこんで苦しいこともいやな事も多かろうが、そこは年の精で隠忍風波もなく、孫共もよくなつき暮しておるのが最上のとりえと申そうか、京都堂上に縁故ある爲か文学趣味もあり、一應は馴狐した処を忘れもせず、ちよい〳〵口吻にもらす。川柳狡句の相談はいつも彼女で、拙句披露に及ぶと忌憚なき批判する事程左樣に愛嬌たつぷり。

餘り書くと叱られる

尼綠之助

背はやゝ低い方、肥満の傾向にあり、正月の二日で四十四才、九人の母性（全員健在）開放性で結婚おしやべりも出來る。町で生れ、町で育つたが十数年前現在の田舎へ移たので（という理由ばかりではあるまいが）田舎のおばさんである。川柳はやらないが、惡いとも言はない。柳友達に対してはあけすけに何んでも話す。長女が近頃家事を手傳うので若干ひまが出來たものか、地方名物お茶事にも時間を使つてゐる樣子です

号は春江

北川春巣

名前は於俊（おとし、少し変だが親からのもの仕方なし）、号は春江（春巣とは関係あるようで実はなし）、生れた年、大正の某年、（小生が大正生れだから小生より若いこと勿論）、容貌は四人も子供を産まなかつた昔の事は云はぬ方がよろしい。

註――十年程前には、本社句会へも出て、鮎美さんに（天）をもらつた事あり。從つて鮎美さんはよく覚えている。

耳鼻咽喉科
牟田病院
院長 牟田哲三郎（一哲）
大阪市南区長堀橋筋交叉点西・電話船場五〇〇〇番

瓶の銀山
大阪市大淀區長柄西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話堀川四四七七

川柳漫釋（5）

小畑自由朗

「はつ〳〵〳〵、必要不必要は兎に角としてぢやれ、わしが代議士に出る時に、当選のあかつきには、あの道路を拡張してやるけんと云うことを、彼奴等村民共に公約したんぢやから」
「而し、部長が何んと云いますか」
「其んなこたあ心配しなくつたつていゝ、今知事の奴とも篤と相談しといたけん」
「はあ、いや、それなら、わかりましてございます」
「はつ〳〵〳〵、わしは又、明日から國会の方がいそがしいんで東京さ行かにやならんけん、何分共に頼む、これ、ほんの其餞ぢやがれ」
「あ、こ、これだけは困ります」
「馬鹿、今時そんな馬鹿固いことを云つとつちや出世せんぞ」
「はあ、ぢや、兎に角」

お預りして置きますと袖の下
（無骨）

○

「あゝもし〳〵、もう電車が來るんですかられ、そうホームから首を出したらあぶないですよ」
「何をッ、馬鹿野郎ッ、それが來れえから首を長うして待つて居るんぢやれえか」
「ほら、來ました、もつと後え後え」
「うるさい、俺をどうし様つて云うだい」
「どうもしませんよ、あなたの様に酔つぱらつて、ふら〳〵して居たらあぶないぢやありませんか」
「危いと思うたら、ていちょうにお乘せ申さんかい、俺あお客さんだぞ」
「わかりました、さあ早くお乘りなさい」
「よし、乘つたる、呀ッ、こいつあいけれえ」
「どうしたんですか」
「どうもこうもあるかい、てめい、俺を六三型に乘つけてどうしようつて云うだい」

酔つぱらひも六三型は避けて乘り
（高志）

○

「いくらお店の方がいそがしいからつて、年がら年中、朝飯だけうちでがさ〳〵とたべて、毎晩こんな時分でなけりや帰つていらつしやらないなんて、あたしつまらないわよ」
「俺だつてつまらないよ、たまにやタめしだけでも家でゆつくりくつて見たいよ。而し、こういそがしくつちや、それどころうか、命が持ちそうにねえよ」
「でも、いくらそれだからつて、寝に帰るだけなんて、あたし、あんたのお二号さんぢやないわよ」

寝に歸るだけの夫にすねて見る
（芳泉）

○

「まあ、あんた、なんで帰つて來やはれましたんや」
「なんでてお前、会社え行つたら門が締つてしもとるがな」
「そら又なんでだすねやいな」
「日曜やがな」
「まあ、あれ、坊やもお弁当ぶら〳〵さしもつて帰つて來よりますがな」
「あたり前やがな、会社が日曜なら学校も日曜日に決つてるがな」

父さんは呑氣呑氣な子が言ち
（寂坊）

○

「私もね、何も借りた物を、返えしやしないとは云つちや居ないのですかられ」
「はい」
「でも、今のところ、どう仕様にも、無い物は無いんだから」
「はい、では、何日頃又、参りましたら御都合が願えますで」
「そうですね、まあ其間に、多少でも何んとか考えて見ておきましよう」
「はい、では、何分共よろしく、お願い申しますでございますで」

貸して居る方がおじぎをして歸り
（八九坡）

謹賀新春

年あらたこゝろの旅がまたつゞく

竹内潮花
大阪市生野区中川町二ノ三〇番地

木村孤浪
平塚市馬入二九〇九

三條東洋樹
愛子
神戸市兵庫区神田町七九

冨士野鞍馬
東京都新宿区若葉一丁目十五番地

川村伊知呂
大阪市南区桃谷町七一

西尾莱
大阪府中河内郡曙川村字八尾木電話八尾一七三番

土井文蝶
大阪市西成区松通九丁目二十二番地

須崎豆秋
大阪市阿倍野区旭町三丁目一四

正月は故郷へ帰ると予防線
吉田水車
名古屋市千種区鶴舞町一ノ六五

私達のグループ（二）

貝塚市　体温川柳會

○

「うわあー、何んと鮮に投げつけられよりましたな」

「……」

「流石は刑事だすな」

「あんた、それ何を云うてなはんれ」

「はあ？」

「あの投げつけられよつたん犯人と違いまんねやで」

「へえ？　あれ！　投げつけた方がどん〳〵走り出しましたがな」

「つまりあれが犯人だすがな」

「ほな〳〵〳〵、あの投げつけられた方が刑事さんで」

「そうだすがな」

「ほな〳〵、あないして、刑事さんがのびてはつて、犯人があないに走り出したら、こら一体どないなりますのんで」

鮮やかに刑事の方が投げられる

（百郎）

○

「盲腸の方の手術はうまく行ったんですがれ」

「はい」

「而し、殘念ながらどうも心臓の方がれ」

「はい、でも、伴は心臓の方は至つて丈夫な方だつて、兼々先生におつしやつていただいて居りましたのですが」

「そうでしたれ、だが今度の盲腸炎ですつかり弱つちやつとつたんですれ」

心臓が持たなかつたとけりをつけ

（春雄）

故異無一物氏の盡力で、千石莊川柳会が生れたのは十年ほど前のことで、市場沒食子師によつて口開けをされ、次で麻生路郎師に指導をうけることになり、初め〝ひびき〟と称するプリントを出した。そのころは隣接の傷痍軍人の大阪療養所の人たちとも交流して、句会なども七八十人集り、相当威勢よくやつていたが、終戰と同時に柳人も散り〳〵ばら〳〵、退莊したり他界したりで、こゝばかりではなかろうが一時はほんとに寂れてしまつた有様だつた。そうした中に起ち上つたのが、昨年八月に物故した千原庸司君であつた。

再び路郎師を迎え、師によつて新しく〝体温〟と名付けていただき、〝ひびき川柳会〟は〝体温川柳会〟と面目を一新した。それからは庸司君が一人で重荷を負つて運営して行つた。しかし、庸司君も病には克てず昨年八月十二日、その後の成果も見ずにこの世を去つていつた。過ぐる九月十六日に〝体温〟では路郎師、沒食子師を迎えて庸司一周忌追善句会を營んだ。

写眞はその時のものであるが、〝体温〟の会員はこゝへ顔を出しているだけではない。氷山の一角とまでは行かないが、こゝへ顔を見せていない会員の方が多く、この写眞の頭數以上が「川雜」の購読者という勉強ぶりで、毎月川柳雜誌社から小包がどさり〳〵と放り込まれる。

職歴もさまざま、年令的にも中・壯・青年とほど〳〵に居り、会員数は現在八十余。何しろ永住の地でないだけに、金魚の水を替えるように、つれに少しづつ顔ぶれの変つていくのは致し方のないことである。（梵鐘記）

石井伸生
奈良縣五條町田中

北川春巣
大阪市北区東扇町二一
大阪市交通局病院内科

山田季賛
山田スミ子
廣島縣可部局区内
亀山村綾ケ谷

岸南柳
大阪市阿倍野区天王寺町北一ノ一八　岸男前製造所

沢田四郎作
小兒科・沢田医院
大阪市西成区玉出本通一ノ三

川柳さつき
さつき川柳社
大阪市東淀川局区内下新庄町六四五

川雜下關支部
藤井米三郎　高橋かうたる
國弘半休門　坂田良坊
石川侃流　中村九呂平
藤加素人　加藤司楼
岩崎男記　伊藤柳坊
三浦十郎　奇鹿のぼる
津島眞坊　畠山多辻
原田眞砂　岡藤市
上國たかし　佳沢紫魂
多田ほなみ　大塩哲志
今岡今生　津島白竜
三田周平　内田茶人
山田伊佐夫

大阪市東住吉区田辺東之町七ノ三三
小川恒明

大阪市旭区今市町二ノ一四九
東喜久堂

川雜下関支部
國弘伍一
号半休門

川雜姫路支部一同
夷一笑
狩野燕子

徒然草と古川柳

—追補の二—

冨士野　鞍馬

好物は三百貫も喰いなくし　（拾八）

「徒然草」六十段に

「眞乘院に盛親僧都とて、やむごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物を好みて、多く食ひけり。談義の座にても、大きなる鉢にうづたかく盛りて、膝もとに置きつゝ食ひながら書をも読みけり。煩ふことあるには、七日二七日など、療治とて籠り居て、思ふやうによきいもがしらを択びて、ことに多く食ひて、よろづの病をいやしけり。人に食はすこととなし。ただ一人のみだ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに、銭三百貫と坊一つを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三万疋をいもがしらのあしと定めて、京なる人に預けおきて、十貫づゝ取り寄せて、いもがしらを乏しからずめしけるほどに、又ことように用ゐることなくて、そのあし皆になりにけり。三百貫のものを貪しき身にまうけて、かくはからひける、まことにあり難き道心者なりとぞ人申しける。」

とあり。

眞乘院は洛西御室仁和寺門主の隠居所で、盛親僧都は、師匠から譲られた三百貫（三百五十四段に万疋）を全部芋頭（カシライモ）を買つて食つてしまつたといふ奇人であつた。

兼好がいけんに付て底をいれ　（タル三七）

三段に

「よろづにいみじくとも、色好まざらむ男は、いとさうざうしく、玉の盃底なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて、所定めずまどひありき。親のいさめ世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるはひとりねがちに、まどろむ夜なきこそおかしけれ。さりとてひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれむこそ、あらまほしかるべきわざなれ。」

と兼好は、男は恋を知らないではつまらない、盃の底のないようなものだ。恋のせつなさ、つらさなど味わうところに人生の趣がある。然し女に畏敬されるのでなくてはならないといつている。それで盃に底をいれて恋をするという句であろう。

雨宿りゑ食の中に中納言　（タル三一）

「この人東寺の門に雨やどりせられたりけるに、かたわものども集りゐたるが、手も足もれぢけゆがみ、うちかへりて、いづくも不具にことやうなるを見て、とりどりにたぐひなきくせ者なり。最も愛するに足れりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくくいぶせく覚えければ、ただすなほにめづらしからぬものにはしかずと思ひて、帰りて後、この間植木を好みて、ことやうに曲折あるをもとめて、目を喜ばしめつるは、かのかたわを愛するなりけりと、興なく覚えければ、鉢に植ゑられける木どもみな掘り棄てられにけり。さもありぬべき事なり。」

とあり。「この人」というのは権中納言藤原資朝のことで、後醍醐天皇をたすけて、建武の中興を企てた人で、その逸話を兼好が右のように書いたのである。尚次のような句もあり。

中納言九條あたりにしるべなし
雨宿り資朝胸がむか〳〵し
めんつうで食ふを資朝初に見る
まんぞくなものは資朝ばかり也
まきえに資朝犬にほえられる
御公家様下りませと雨やどり
いざりの駈けたは資朝初に見る
いざり松資朝それも捨てろ也
植木屋へ資朝みんな賣拂ひ
資朝と持者雨で智恵がつき

雨宿りに不具の乞食を見て悟るところがあり、盆栽の不自然にひねくれたのも不具のみにくさとして棄ててしまつたというのである。

謹賀新春

前田伍健	松山市眞砂町二一	横浜市保土ケ谷区岩崎町一〇 福田山雨楼
尼絲之助	出雲市高松	大阪市阿倍野区王子町三ノ三四 菊沢小松園
中島鉄洲	鳥取市川端町三ノ一五	大阪市阿倍野区文の里四丁目一五四 山人居 水谷竹荘
杉谷湖山	鳥取市職人町	下関市東局区内上田中八了 専賣公社々宅 弘津柳慶
石田沐天	阿倍野区阪南町西二ノ三三	阿倍野局区内王子町二ノ五三 山本葉光
長野文庫	今治市神明町	大阪市東淀川区豊里管原町 飯田工場 群星川柳会
西口如川	熊本縣菊池郡大津町	大阪府泉南郡東鳥取村黒田四八二 阿形一杉
小島祝平	津山市	大阪市北区扇町四六 渡辺完（孫拙）電話(357)二三九七
橋本晴の助	津山市美濃町	大阪市東淀川区國矢町四五二 表天貧
秋月宏方	和歌山市今福部北一二八	大阪市東淀川区木川西之町三 西森花村
大阪・天六（元石川縣） 山崎帆加夫		大阪市阿倍野区天王寺町北三丁目五五ノ一 富岡淡舟
大阪 金泉萬樂		岡山縣勝田郡豊國村 豊國我柳会 岡田夜潮

不朽洞会から

▼櫻川不水氏（下関市）十一月十六日附で室蘭港潮丸から通信あり再び船員生活に入り、北米から印度に行き来春三月頃帰るとの由▼黄瀬美秋氏（滋賀縣）は十一月二十四日華燭の典を挙げられた▼廊生路郎師は山陽新聞社会事業関主催の歳末厚生義金造成書画工藝展へ色紙二点を贈られた▼福田妄夢氏は大阪市西成区新開通二丁目一八へ移轉▼山田季賛氏（廣島縣）は十一月二十三日二十四日を滋賀へ帰省された▼戸倉青天氏（兵庫縣）は十一月廿五日、柏原で開催された丹波新聞社主催の川柳大会で講話をされたと▼平田一哲博士（大阪市）はスト中に送電措置をとられ幼児を手術、一命を救われた▼川村好郎氏（東京都）は疲労が原因で十月頃から病臥、十二月に入つて漸く快癒された▼家沢菁花氏は篠山から郷里の兵庫縣多紀郡日置村辻九八七へ移居▼松野えいを氏（佐賀縣）は十一月末日限り一身上の都合で退会された▼竹田芦穂氏（大阪市）は十月限退会

新会員紹介

十一月

田垣方　大氏（岡山縣）正
　　満年氏推薦

十二月

那谷光郎氏（石川縣）正
野村味平氏（同）正
　　葭乃女史推薦
東野大八氏（岐阜縣）
右、洞友に推薦

壽像贈呈者御芳名

（敬省略・廊生路郎先生）

十口　像付　堺市　吉田圭井堂
一口　西宮市　西垣武彦
一口　岡山市　大倉四案
一口　滋賀縣　黄瀬美秋
一口　大阪市　東喜久堂
三口　下関市　高橋かうたる
三口　下関市　坂田良坊
一口　下関市　國弘半休門
一口　下関市　石川侃流
一口　下関市　弘津柳慶
一口　川雑下関支部同人一同
一基（石香像）同
五口　兵庫縣　奥村丹路
一口　愛媛縣　月原宵明
一基　石香像　同
二口　大阪市　黒木彈正
二口　大阪市　田中鳥耕
一基（石香像）同
二口半　大阪市　安岡珊枝郎
五口　川雑京都支部同人一同
二口　大阪府　種瓜平
二口半　大阪市　松江梅里
一口　廣島縣　山田季賛
一基（石香像）同
十口　像付　奈良縣　上田翠光
一口　奈良縣　飯降白香
一口　大阪市　新川博也
二口　大阪市　長谷沢義英
一口　島根縣　藤井明郎
以上十二月十四日までの分以下次号

一路集

一泊

菊沢小松園選

一泊は居殘りの組見て帰えり　不二
算盤を持つて一泊汽車の中　川鳥
一泊のつもりで來たに愛想なし　万年
交際といふ一泊は派手に來る　三思楼
欺された一夜の宿の朝が明け　夏六
温泉の一夜泊りは恋にされ　実信
一泊づゝ支店叱りに社長立つ　自由朗
一泊でみなもの足らぬ社用族　山雨楼
下心あつて一と晩泊らされ　芳泉
一泊が二泊となつた倦怠期　德丸
一泊を車中で済ます出張費　水車
一泊が二泊となつた宿のよさ　忠美
連休の一泊組が温泉をにごし　甲馬
一泊へ女の夢の多すぎて　湖月
一泊を汽車でうかした疲れやう　法泉子
一泊に恥らう人の酌を受け　代仕男
一泊をする氣の女持てあまし　鉄兒
一泊の方へ女生徒手を挙げる　太路
一泊の旅へ童心れむられず　英子
一泊で別れとうない夢を持ち　秀峯
一泊で帰るにおしいゝ景色　折草
一泊の宿が忘れぬ年賀狀　富郎
一泊の予定予定が狂つて來方眠　
この辺で一泊したい汽車の窓羅漢
日先に乗つて一泊してしまひ　侃流
一泊の旅へ名所が多過ぎる　杜的
一泊の帰り言訳考へる　格一
一泊もせずに里から戻る妻　わたる
一泊は温泉マーク振り返えり　満年
一泊は夜汽車を入れるプランにて　茶々
一泊へ妻の希望も入れてやり　三葉
一泊あしたがすらと出　方大
一泊のつもりへ泊れとも言はず　十九平
童貞のまゝ一泊の夜が明ける　同
一泊の理由に伯母が附添うて　日満子
一泊の一人二人が抜けて出る　ひかる
一泊の女の方は落ち附けず　七面山
一泊の車窓へ富士の朝ぼらけ　美嬉適
佳・一泊の朝は他人でない二人　大彦
佳・一泊の留守へスイッチ切つて置く　日本村
佳・一泊で一年の汗絞られる　自由朗
佳・一泊は他人のまゝで温泉につかり　葉光
佳・一泊に触れず土産に目もくれず　谷水
軸・一泊は一泊丈けのチップ置く

★課題「女將」の選稿遅延に付次号発表

にぎひとり美顔水
横谷厚天堂

川雑京都支部（ABC順）
京都市上京区室町通寺ノ内上ル　藤原和朗
京都市東山区山科勧修寺下ノ茶屋三四　平岩司郎
京都市東山区鷲山町五　今田蘇海
京都市上京区衣棚通上御霊神社前下ル　井ノ下晴芽
京都市上京区室町通寺ノ内上ル　井ノ下秀人
京都市左京区浄土寺眞如町四　村松夢裡
京都市左京区下鴨花園町　長尾案生子
京都市伏見区深草相深町一九　大鶴喜由
京都市上京区相國寺北門前町上ノ町　田中千潮
　　田中鳥雀
京都市上京区鞍馬口通り室町西入ル　八木迷々

川雀出雲支部廿五周年記念　山陰川柳大會

十一月二十三日午前十時から、尼子之助支部長の手で出雲市公会堂で華々しく開催された。本社より麻生路郎主幹出席、選句と講演を行つた。壹取、米子、松江、大社木次の各地柳人が参会、地元柳人を加えて九十名、名実共に山陰川柳大会だつた

花地物語

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社師走川柳大會（大阪）

十二月一日　午後六時　於大宝文化会館

十二月のトップを切つて師走川柳大会は賑々しく開催された。路郎師の柳話は「本物と贋物」と云ふ事に就いて実話を引用して語られ、句の質に説き及ぼされた。句会進行の都合で披講の間へはさまれた放送劇は歌舞伎の味を見せ、喜劇の社長さんはビール腹の貫録を出し、端役ながら女中は三枚目の味を見せてゐたが、時々の停電で台本のカンニングが不能となり、付焼刃の台詞よろしく幕となつたのも喜劇らしい。竹莊氏考案の川柳福引も笑声、渦を巻く中で品物が手渡された。閉会は午後九時半。本月のベストテン不朽洞優勝カップ把持者は坂田久仁於氏であつた。（幹事）

出席者＝路郎・紅山・黒天子・夢裡・唯義・わたる・翼骨・一ン十・哲水・喜久堂・文蝶・無人・愛論・春草・久仁於・万樂・翠光・白香・淡舟・幸男・紫香・鮎美・史葉・日出也・天貧・竹莊・俊作・娯舎亭・潤壽子・胡蝶・春柳・塔仙・博也・瓜平・酔歩・義英・生々庵・梅志・恒明・沒食子・春巣・豆秋・湖洲・小松園・烏莊・栞・里十九・花村・梅里・八重子・三司・晴巣・貞女・梨里・ＰＯＥ・葭乃

兼題「現金」　麻生路郎選

キャツシュなら負けておこなぞ電話切り　沒食子
お馴染へ現金賣やとも云えず　鉄兒
ヘソクリの紙幣は母のぬくもり　白香
現金を出せば出したで本物か　花村
現金で何十万の手切金　沒食子
見せ金が我が社の弱さ衝いてくる　わたる
現金で呑むくらいなら他で呑む　梅里
現金へ惜しい商品手放され　白香
現金はＯＫ電話を軽う切り　文蝶
あわれ鷲掴みにされし現金よ　春柳
現金で叩けばもろく折れてくる　梅里
現金は弁当箱の中で無事　淡舟
現金を叩き返へして縫付ける　小松園
現金を持てば家には居れない性　花村
現金と暮らし質屋は客を待ち　文蝶
福引も現金がよいつかみどり　花村
車賃お内儀に出さす程になり　黒天子
拐帯の札トランクに伊豆伊東　酔歩
現金を見せると女勝の声かわり　里十九
ポケットから現金も出る土左エ門　帆加夫
運チャンを締めた現金これつたり　同
手の切れる現金を出す社用族　史葉
キャツシュでつかえへと揉手していたり　ＰＯＥ
現金な奴や風邪でも引きあがれ　鮎美
無鞍と言ふ現金が喜ばれ　十九平
木枯よキャツシュが出来る迄吹くな　翼骨
バツタの様にして現金をもつて来た　ＰＯＥ
酔ふてゐるぼつぼへ現金ほりこまれ　紫香
現ナマへ倉地も捨てて十二月　瓜平
現金で見舞が慾しいとも云えず　俊作
菓子折の現金税吏ためらはず　翠光
時折は想ふ百万円の嵩　喜久堂
現金を握り遁れるやうに去に　小松園
そでの下にある現金のもつ魅力　紅山
現金の置場妻だけ知つてゐる　淡舟
（人）香典の封を破つて支拂われ　万樂
（地）水臭うおますと現金押し返へし　生々庵

（天）現送へ人間二人疲れ切り　春巣
（軸）現ナマへあれだけあれば安と思い　路郎
お年寄へチップがあると見てたから　同
これだけで呑ましてくれと梯子酒　同
現金へ下駄も履さんばかりにし　同
引抜いてくれたチップのたかに惚れ　同

兼題「場末」　市場沒食子選

場末ではとても人氣のある一座　湖洲
交番でまだぐだまいてゐる場末　梅里
旅愁ふと場末の易の灯に頼り　久仁於
見逃した映画場末で見せてくれ　竹莊
横塀を抜いて場末のこあきなひ　ＰＯＥ
景氣良く場末に響く粋の音　天貧
流れ〳〵て場末に働く身　烏莊
場末の夜霧が街に流れる　鮎美
湯豆腐で場末の夜に住み馴れて　生々庵
街燈は場末のポスに負けて居ず　史葉
ませてゐる少年場末の灯にもぐり　鮎美
麦喰えの声は場末へピンときた　瓜平
頼まれてくれと場末でもめてゐる　俊作
場末からゆつくりと出るよい男　里十九
リンタクは場末へ來るとやくりだし　紅山
あれ男だつか場末の灯は暗し　文蝶
焼けなんだ場末が今の繁華街　十九平
ドブ板が皆んな焚かれている場末　鉄兒
場末にも鈴蘭燈が点き初め　喜久堂
メトロにも居たりと場末の夜の女　哲水

東京そばと
灘一とすじ
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店　大萬
★大万川柳（第十一回）を募る
兼題「ポチ袋」　路郎先生選
締切・一月十五日　句数五句以内
発表・一月廿一日（店内に掲示）
御投句は大万宛・どなたでも

場末から買い出しに來る松屋町　喜久堂
場末荒荒して廻る社用族　義英
おもろうに呑まうとする場末　豆秋
メタンガス場末の河に浮いた猫　醉歩
場末賬はし東西屋の鉦太鼓　恒明
停電の場末見事な月になり　梅志
看板のめしへ芙美子の好きな街　夢裡
負けられぬ意地が場末にシャンと住る　久仁於
工場から帰る場末のコップ酒　万樂
場末でもわが往わが家よいところ　恒明
俳きもせず同じレコード聽く場末　湖洲
醉うて來て場末は星を仰ぐとこ　唯義
風呂や散髪屋と場末ひらけて來　栞
(人)あきらめた樣に場末の歳が暮れ　生々庵
(地)商魂がにじむ場末の繩のれん　無人
(天)神のある場末でストの子を案じ　梅志
(軸)見透もつかず場末で店を開け　浅食子

兼題「寄せ鍋」　中島生々庵選

寄せ鍋へ子供の数が多すぎる　黒天子
返杯の猪口寄せ鍋の湯氣を越え　葭乃
寄せ鍋の最後はめしをほりこまれ　花村
生活と別に寄せ鍋つゝき合い　夢裡
寄せ鍋は二人だまつたまま煮える　博也
盃が乱れ寄せ鍋暇になり　久仁於
寄せ鍋は裏を残して煮えつまり　嫫舎亭
よせ鍋に別れし妻を思い出し　義英
見本とは違う寄せ鍋もつて來る　竹韮
寄せ鍋へバーマ氣にてたぢり寄り　小松園
寄せ鍋の底見えてきて母の番　瓜平
寄せ鍋へまだ偏食の妻で居る　わたる
寄せ鍋にまだ金策を切り出せず　万樂
寄せ鍋をはしらと子らに呑み　わたる
ろうそくの灯で寄せ鍋煮へつゝ　紫香
寄せ鍋へ妻もはずした割烹着　晋水
よせ鍋にえびの尻尾だけ残し　梅里
寄せ鍋え月がくだける川向ひ　鮎美
よせ鍋に女の過去を訊いて呑み　愛論
寄せ鍋も二人で食へば静なり　花村
寄せ鍋へ新妻といふ手を伸し　栞
寄せ鍋の母へやつぱり立つ用事　唯義
寄せ鍋へ家族揃ふた声になり　博也
寄せ鍋の中の一人は赤い爪　久仁於
(人)宿直へ寄せ鍋が來る夜の冷え　淡舟
(地)寄せ鍋へ赤い唇とがらせる　白香
(天)寄せ鍋で呑んで小鉢で呑み直し　天貧

席題「十八番」　菊沢小松園選

十八番あれから頭上がらない　無人
十八番さすがに風邪をひいても　豆秋
おはこ出る酒席拍子と別な声　醉歩
三味線が合わして呉れてるおはこ　唯義
公金で呑めばおはこも派手になり　晋水
十八番錆は大きく一つなり　胡蝶
つきあいで十八番へ手を拍たき　豆秋
同伴の今宵は出せぬ十八番　瓜平
平社員十八番でみとめられ　義英
十八番一人歌ふて一人きゝ　紅山
十八番そろ〳〵鼻についてくる　梅里
云いわけは十八番が風邪を引き　生々庵
出おくれのおはこの声は消されがち　瓜平
あかれてる十八番とは露知らず　醉歩
醉さめるやうな十八番がまだ続き　翠光
偏屈はへんくつなりのかくし藝　幸男
醉えば出る十八番をもてあまし　一ン十
醉うてなほ声冴えてくる十八番　春柳
十八番出る頃みんな醉いしびれ　潤溢子
十八番もう笑へない声になり　無人
十八番出してそれから醉ひつぶれ　紫香
また酒が足らず十八番を出ししぶり　淡舟
十八番三味の音しめをしめかえる　春柳
連れ添うて始めて聽かす十八番　湖洲
十八番藝出す氣盃加減する　万樂
(人)十八番などおますかいなとのみつづけ　恒明
(地)十八番場数を踏んだ顔で立ち　翠光
(天)もと入れた濃いおはこへ聞き惚れる　醉歩
(軸)十八番やつぱりしんとさせて立ち　小松園

席題「座り込み」　黒川紫香選

座り込み男女の別はちやんとつけ　春集
坐り込み妻も子もある声を出し　無人
座り込み雙手の男旗を持ち　閻骨
坐り込みその足音に落ち附かず　無人
母一人楽じさせてる座り込み　文蝶
座り込み中の一人はガムを噛み　嫫舎亭
座り込み社長のセキの数を読み　晋水
座り込み上手な男のふところ手　鮎美
どぶ飲んで來たきはすごい座り込み　久仁於
水漠をしきりにすゝる座り込み　栞
座り込み雨がだん〳〵きつくなり　恒明
クーポンのパンで静かに座り込み　久仁於
解決へ暫く立てぬ座り込み　唯義
座り込みさつさり着込んで出掛ける氣　愛論
座り込み仁王の樣な奴を選り　夢裡
座り込み西日まともに顔へくる　嫫舎亭
座り込みほんとは無理と知つてる　博也
座り込に慣れて会社は非を打ち　喜久堂
子が死んだことも知らない座り込み　淡舟
午前二時もう座り込み默つてい　愛論
坐り込みは日向の方へ寄りたがり　瓜平
ここからかラヂオ聞こえる座り込み　万樂
座り込み宵の口から腹が減り　文蝶
(人)小便にまた立つて行く座り込み　淡舟
(地)座り込む女が編んでいる毛糸　久仁於
(天)座り込む社長の咳が壁一重　小松園

社の告知板

▼昭和廿六年度の川柳不朽洞会賞の優勝カップ把持者は本社新春句会当日カップ獲得の決戦句会を行うので例刻より一時間早く出席されたい。（決戦課題正五時会場で発表）把持者氏名は下記の諸子。香林・博也・晋水・生々庵・妄夢・花村・喜久堂・愛論・文蝶・翠光・久仁於

▼BKが浚川柳の二月放送課題「迷信」（市場浚食子氏選）の締切は一月末日限、ハガキ一葉に二句、大阪市東区馬場町大阪中央局BK放送川柳の会宛

小児科
内科
性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰東へ半丁浜側
電話南㊱二三一四六

版写謄田阪
大阪市北区芝田町二五
株式会社 阪田商会
電話 福島五九九一番 五六三一——四番

品質優良
タチカワペン先
TACHIKAWA PEN
タチカワピン
タチカワセム
タチカワ画鋲
大阪市東区鍛後町四八
立川商事株式会社

謹賀新春

編輯局

▼本年も編輯局はガン張って、愛読者各位の御支援におこたえすることを誓う。▼新春句会は一月五日(土)午後六時から大宝文化会館で開催する。万障を排して参加されたい▼福田山雨楼氏は「作家・水谷鮎美を論す」を寄せられた▼戸田古方氏の詠史川柳「にっぽん」は本号で完結した。同氏の労を多とする▼掲稿「統川柳講座」は兎糞的発表で恐縮の外ないが目下の処時間を持たないので寛恕されたい。▼特別読物として川柳不朽洞会の人達に「ベターハーフを語る」を寄せてもらった。誰も彼も我がつまならではと云うところ、ほほえましい記事ではある▼本号から定價を改正することにした。理由は説明するまでもなかろうと思うので説明しないことにした。ただ〳〵御諒承のほどを(路)

―動　靜―

▼本社師走川柳大会は十二月一日午後六時から大宝文化会館三階で開催▼川雑備前支部忘年句会は十二月八日夜、久米雄居で開催▼川雑大阪南支部忘年句会は十二月十五日夕から阿倍王子神社で開催▼大阪遵信病院忘年川柳会は十二月二十日午後四時から五階講堂で開催▼南区医師会文化部香林川柳会は十二月廿三日午後四時から生駒山麓へうたん山の上六屋で開催▼一路川柳会は十二月十三日午後五時半から高島屋飯田株式会社で開催▼南海電鉄忘年川柳会は十二月廿六日午後十七時から南海高等学校で開催▼第二回山陽新聞読者川柳大会は十二月九日午前十時から岡山市山陽新聞社講堂で開催。以上何れも路郎主幹出席▼川雑京都支部句会は十一月十六日夕から仲源寺で開催▼川雑岡山支部句会は十一月廿三日弘済会ハウスで開催▼川雑下関支部忘年句会並に闇鍋会は十二月十五日開催▼玉野市主催文化祭川柳大会は十一月十八日玉野市和田支所で開催▼川雑岡山支部から大森風來子、藤本湖年氏等出席▼日奈久町公民館主催の新春川柳大会(熊本縣)が一月十三日正午日奈久温泉鑑屋旅館で開催される▼美作新年川柳大会が、つやま川柳社主催の下に一月二日午前十時から津山商工会議所で開催される▼富士野鞍馬氏(東京都)は十一月三日に市川市の文化祭で川柳講演と選評された▼東野大八氏(岐阜縣)は「東海夕刊」でカメラ川柳を募り、人氣を博していられる。同じカメラ川柳でも扱い方で興味のあるものとなることを実証してゐる▼月原宵明氏は高知から郷里今治へ轉勤されたので愛媛縣越智郡櫻井町へ帰郷された▼村田流水氏(ハワイ)元川柳不朽洞会員の同氏は十月十七日腦溢血で急逝された謹んで悼む。

確実避妊のために
山之内
サンシーゼリー
セット　250円
ゼリー20瓦90円
同上　50瓦180円

謹賀新春

川雑東京支部

川村好郎
宮田不二
植田千東
田植ひろし
石居高志
武田登志
加藤守夫
田中稻水
清水一郎
福田山雨楼

客員

謹賀新春

高鷲亞鈍
大西野介
亀山晴峯
益永貞女

特殊紙器工業株式会社
大阪市阿倍野区晴明通一

謹賀新春

稲畑商業株式会社医薬部

賀正　藤岡至藝堂

大阪市東区淀修町二丁目四〇
電話北浜㉙(一二七四番)(一二七五番)(六七五九番)

募集

課題吟募集

アルバイト(十句)　中島生々庵選
誕生(十句)　弘津柳慶選　(一月廿日締切)
地下室(十句)　橋本緑雨選
郷愁(十句)　山根白星選　(二月廿日締切)

毎号募集

近作柳樽(雑詠廿句)麻生路郎選
川柳塔(雑詠)麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)　(毎月廿日締切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第七卷　第一号
一冊　金四〇円　送料(四円)
(禁轉載)
半ケ年概算　二六四円
一ケ年概算　五二八円
昭和廿六年十二月廿五日印刷
昭和廿七年一月一日発行
大阪市住吉区墨江丁代四五丁目二番地
印刷兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉区墨江丁代四五丁目二番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪七五〇五〇